

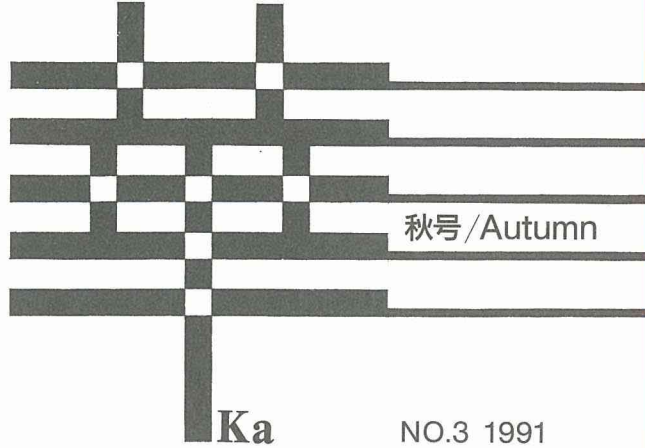
論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 3
発行日 / Pub. date	1991, 11
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。



Ka No.3 1991
 design Journal of
 the department of architecture
 and building engineering
 Tokyo Institute of Technology
 published by TIT society
 of architectural
 design education

編集：東京工業大学工学部建築学科
 建築計画第2講座
 発行：TIT建築設計教育研究会
 定価：400円

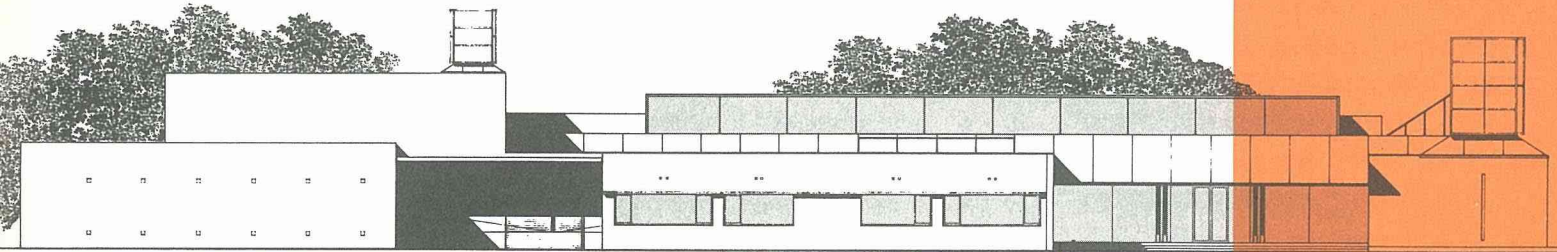


秋号/Autumn

Ka

NO.3 1991

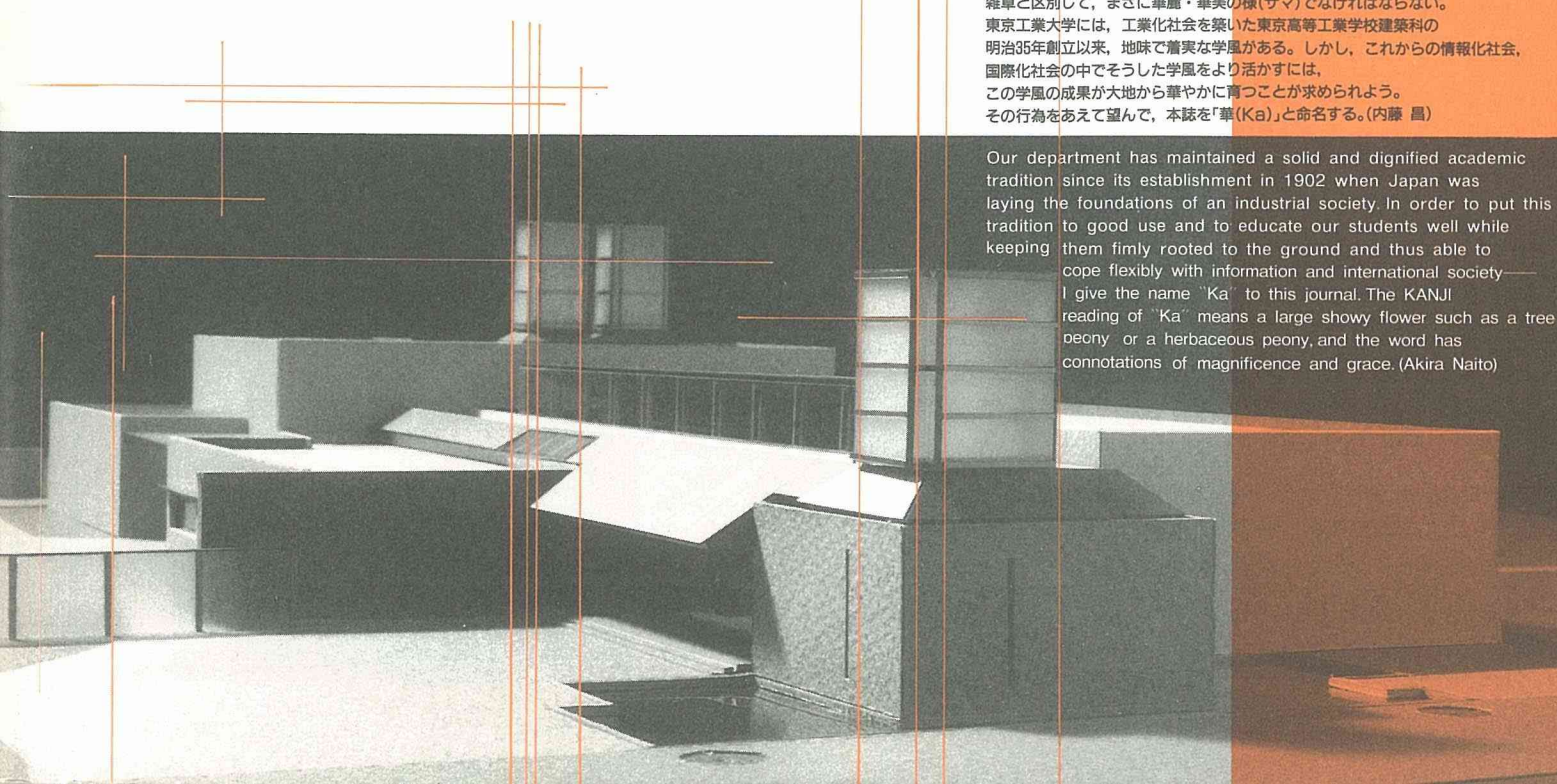
1991年度設計製図第Ⅲ(3年生)優秀作品より—2
 建築設計製図第Ⅰ(2年生)—14
 建築史特論第2(大学院)—16
 建築設計製図概論—18
 G.S.ゴラニー教授特別講義より—19
 私の研究テーマ：内藤 昌—20
 東京工大生だった頃：戸尾任宏—21
 私の設計教育論—22
 先輩、元気ですか！瀬尾文彰さん、武田光史さんを訪ねて—24
 海外体験記(現代米国学生・建築家気質)：安田幸一—26
 当世東工大生事情：鈴木信弘—27
 INFORMATION/NEWS—28



Historic & Ethnic Museum : Tadahiro Toh

「華」は、音で「カ」、訓で「ハナ」と読み、「花」はその略字、俗字である。
 字の構成は「艸」かんむり+葉やハナが生れた姿+発音を示す「于」からなる。
 重要なのは「カ・ウ」で、アーチやドーム状を形容し、
 たとえば「巡回(アーチを描いて曲がる)」、「宇宙(ドーム状にかぶさる天空)」という。
 したがってその姿をもった草花は、
 牡丹(ボタン)や芍薬(シャクヤク)のごとき大輪を形容し、
 雑草と区別して、まさに華麗・華美の様(サマ)でなければならぬ。
 東京工業大学には、工業化社会を築いた東京高等工業学校建築科の
 明治35年創立以来、地味で着実な学風がある。しかし、これからの情報化社会、
 国際化社会の中でそうした学風をより活かすには、
 この学風の成果が大地から華やかに育つことが求められよう。
 その行為をあえて望んで、本誌を「華(Ka)」と命名する。(内藤 昌)

Our department has maintained a solid and dignified academic tradition since its establishment in 1902 when Japan was laying the foundations of an industrial society. In order to put this tradition to good use and to educate our students well while keeping them firmly rooted to the ground and thus able to cope flexibly with information and international society—I give the name "Ka" to this journal. The KANJI reading of "Ka" means a large showy flower such as a tree peony or a herbaceous peony, and the word has connotations of magnificence and grace. (Akira Naito)



1991年度設計製図第Ⅲ(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work : Spring term

ここに紹介するのは東京工業大学建築学科での1991年度前期の「設計製図第Ⅲ」(3年生対象)の3課題の優秀作品の一部である。本年度の「設計製図第Ⅲ」の課題は、トム・ヘネガン講師出題の「ソーシャル・コンデンサー」、松永安光講師出題の「都市のミュージアム」、石井修講師出題の「緑に囲まれて住む・四世代住宅」であった。

project 1

「ソーシャル・コンデンサー」

The Social Condenser

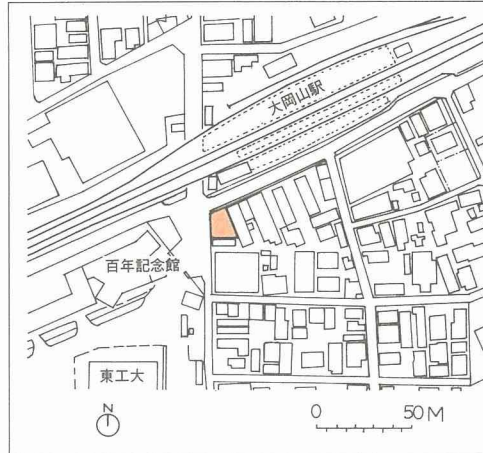
講評 非常勤講師 トム・ヘネガン

ロシア構成主義者たちの革新的コンセプトを借りて、この課題の名前はつけられている。当時のアイデアによれば、都市生活における一般的な行為、たとえば、集団で食事をとり洗濯をし、場合によっては眠る、といった事柄までを、大きな公共建造物の中に“凝縮”することによって、事実上家族のプライベートな空間を不要としてしまうというものである。

それに比べれば、この課題はより素朴で、革新的なことを意図したわけではない。都市では個人の空間を保つことが高価となり、十分な広さをもつことができないため、伊東豊雄のいう遊牧的な状況にある大都会のリアリティを反映したものである。既婚者のうち、かなりの比率の人が互いに初めて出会ったのがコインランドリーであったというデータがニューヨーク市における調査として報告されている。こういった現実が出題の背景となっている。

課題は、コインランドリーとレストランおよび学生自身によって提案されるその他の施設を含む単体建築の設計である。

建築家の役割は、「喜び」「楽しみ」あるいは「知的興奮」を日常の状況の中に創出することであり、またどのような場合でも「喜び」を発見し、開発することにある。ふだんは関係のない2つの施設を結び合わせることで、形のデザインに取り組む前に、そうした状況をつくりだす仕掛けを学生たちに考えさせるというのがこの課題のねらいである。(以下略)



- 第1課題 山下和正教授 トム・ヘネガン講師 4/16~5/16
- 課題主旨: “The Social Condenser”というテーマで、都市生活に有用なさまざまな機能が凝縮された建物を設計する。プログラムの設定からはじめ、それを前提に建築的提案を求めたものである。
- 敷地: 左図。敷地面積176.47m²
- 建物: 用途 建物有効床面積の50%程度をレストランとし、その他の用途は各自が想定する。コインランドリーも含める。容積率300%、建蔽率90% 駐車場・車庫は不要とする。
- 地域地区: 近隣商業地域、準防火地域、第3種高度地区、第2種文教地区
- 日影規制: 5時間, 3時間 h=4m

講評 教授 山下和正

この課題は、コインランドリーとレストランなどを、ひとつの複合体として有機的に結びつける建築的解決を見いだすことが主なテーマであった。現実には存在しないが、存在すれば現実性ももち得るという課題設定の中で、どこまで学生諸君が優れたプログラムをつくり、それを建築化できるかというわけである。

しかし、コインランドリーやレストランなどが、ただ個別に集合しているだけというもののや、コインランドリーに対して、否定的な対応のものが大勢を占めたが、肯定的、積極的に取り組んだ学生も予想外に多かった。

日本では、家庭用自動洗濯機が欧米からみれば驚くほど発達しているため、コインラン

ドリーの占める社会的役割はそれほど大きくはないにしろ、その出現によって生まれる単身者のライフスタイルの変化は、建築プログラムに組み込むには面白い対象と思われる。また、敷地が学生になじみのある東工大正門前の街角に想定されているため、駅前広場(整備予定)、百年記念館、正門といった周囲の要素との関係を考慮するためには、格好の立地であった。

前半でコラージュなどの予備的なトレーニングで時間を使ってしまったので、建築的にまとめ上げるには、やや時間不足であった。例によって学生諸君の最終段階の急ピッチのガンバリで図面が仕上がったのには感心した。また英語を主体とした授業となったが、作品発表の際などは少しはスピーチの準備をしてほしいと思った。



トム・ヘネガン Tom Heneghan

1951年 イギリス生まれ

1975年 AAスクール卒業

1975~76 オープ・アラップ(OVE ARUP)事務所勤務

1979~80 AAスクール講師(ユニットマスター)

1982~84 アリソン&ピーター・スミソン事務所勤務

現在、アーキテクチュア・ファクトリー主宰(東京)

展覧会出展: AAスクール(ロンドン)、

アート・ネット(ロンドン)、現代芸術協会(ロンドン)、王立フェスティバル・ホール(ロンドン)、近代美術館(ニューヨーク)、

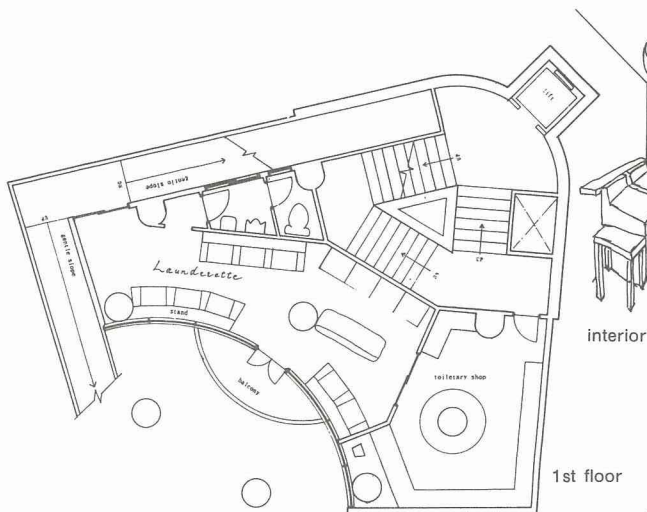
その他にも、ポーランド、フランクフルト、東京での展覧会に出展している。

ソウシャル・コンデンサー

The Social Condenser

浅野耕一

Kôichi Asano

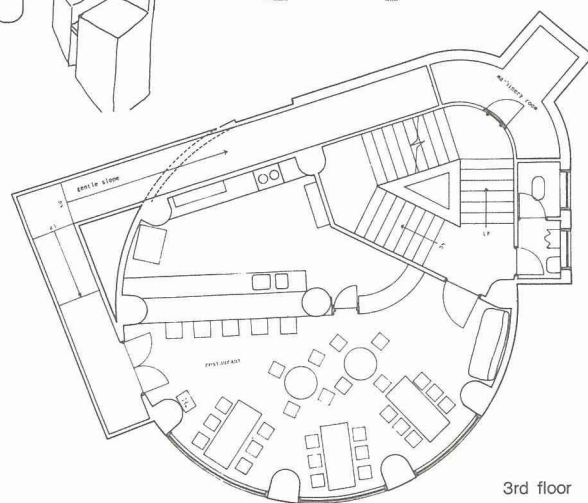


interior

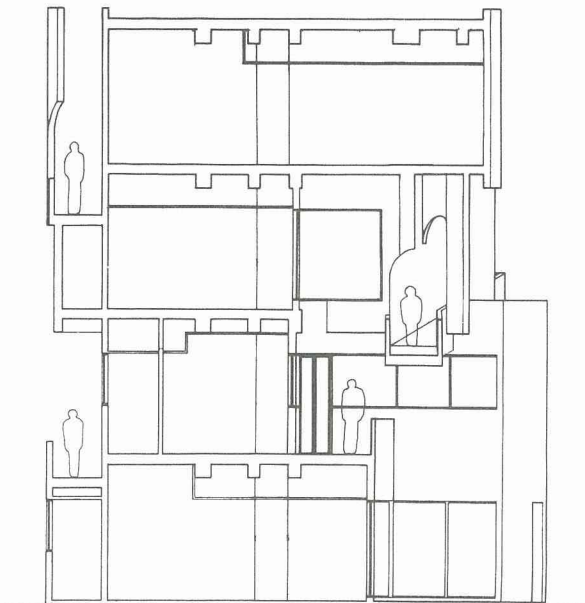
1st floor



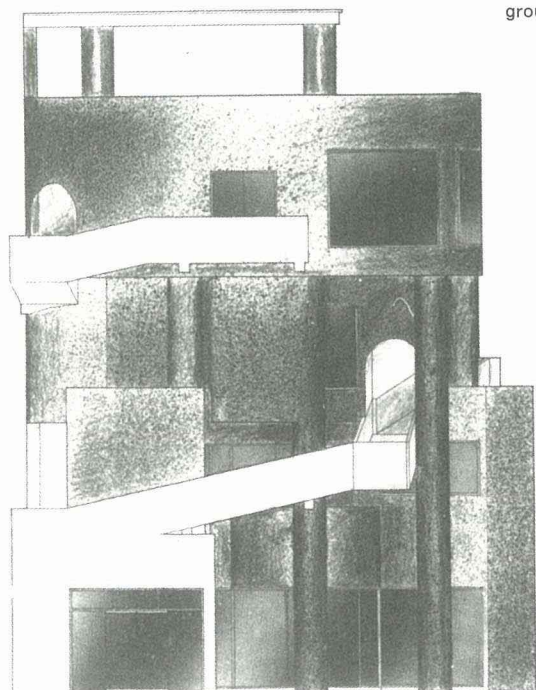
ground floor



3rd floor



section



elevation

■都会の人びとはお互いにとっても無関心だ。高密度な空間の中で、個人の縄張りが確保しづらく、お互いに干渉しあう結果となる。そしてできる限り自分を「閉じる」ことによって縄張りを守ろうとする。そんな日常の殻が壊れ、堅苦しい世間体を捨てられたら……、しかもそんな人びとが交流する場があったら、素晴らしい出会いがあるに違いない。何も考えなくても退屈しない、ボーツとしているけれど充実している。

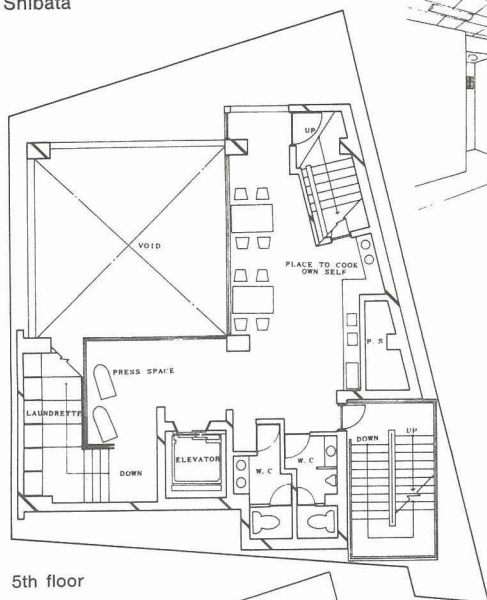
そんなひと時が欲しい。そのために、何も用意がなくても「ついでに」と行動がとれる場があるとよい。リサイクルショップに不要な服を売り、そのお金でコーヒーを飲もう。古着を買って、その場で一緒に洗おう。ピロティは人びとの待合いの場所になる。バルコニーやスロープで人と知り合ったらレストランと一緒にいこう。気軽にいろんな人と触れ合い、気ままに過ごせる空間に、コインランドリーがなるといい。

ソーシャル・コンデンサー

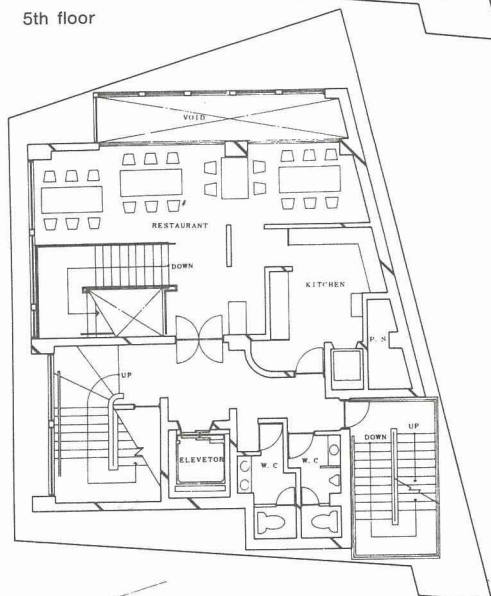
The Social Condenser

柴田哲司

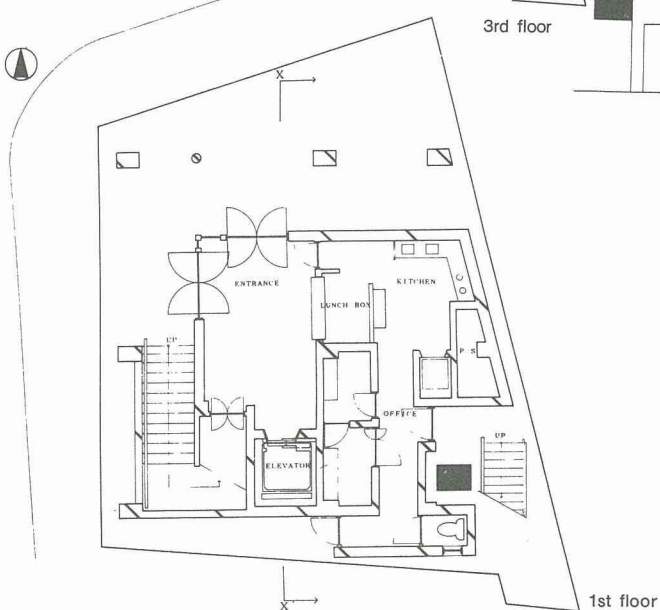
Tetsushi Shibata



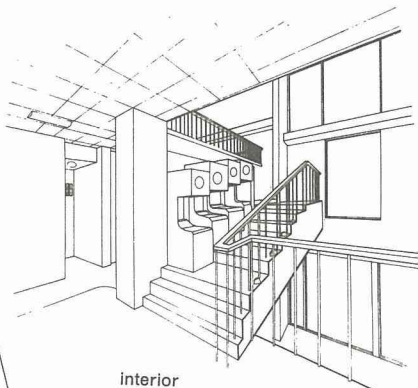
5th floor



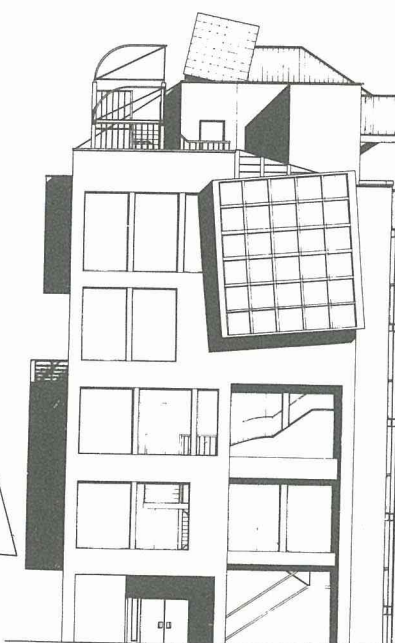
3rd floor



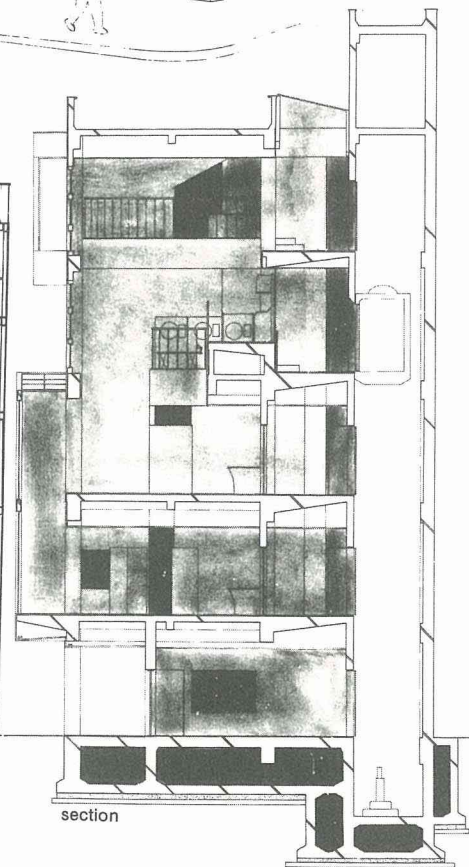
1st floor



interior



west elevation



section

■コインランドリーというものは、現代都市生活において、社会の構成要素である家族という単位が崩れつつあるときに必要とされたものである。その場所（単に洗濯をするだけの場所）に付加的機能を付けることで新しい社会をつくることを目的とした。この建物の中でできる小社会は確実にコンデンサーの存在理由を表わすであろう。■敷地は東工大正門前であるため、利用者をその目的によって分けねばならない。また昼と夜とでは大きく役割が変

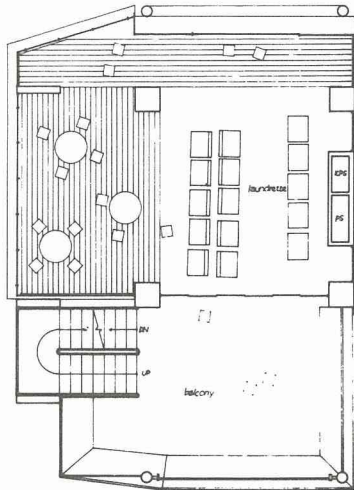
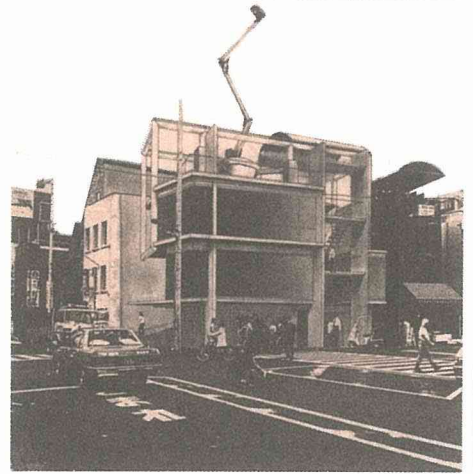
化する。そのため動線を分離し、各フロアに誘導した。そのいっぽうで利用者の行動が個別化しないよう、内部にはレストランとコインランドリーのみを設けた。また用途別に分けたフロアに、大きな吹抜けをつくることによって空間の一体感をもたせた。コインランドリーを象徴的に配置すれば、都市の中でオブジェの役割が与えられ、これまでのコインランドリーにはないイメージをもたせることができるはずだ。

ソーシャル・コンデンサー

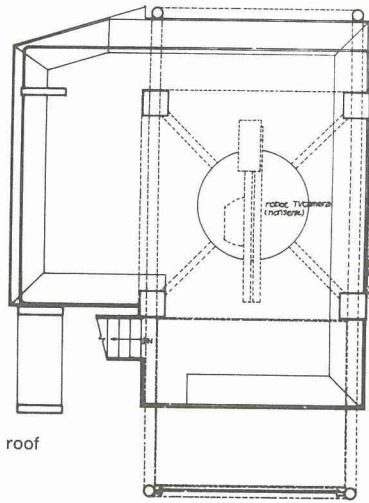
The Social Condenser

深水史郎

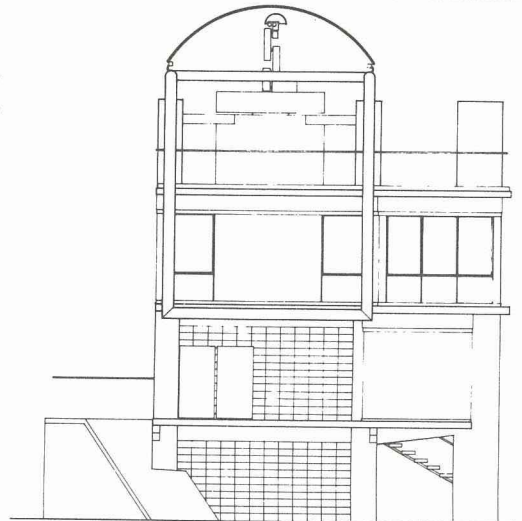
Shirou Fukamizu



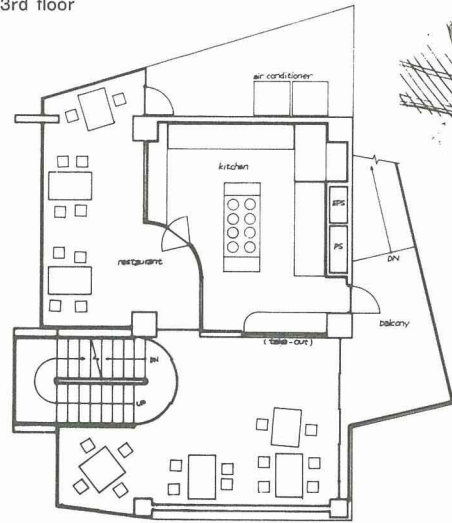
3rd floor



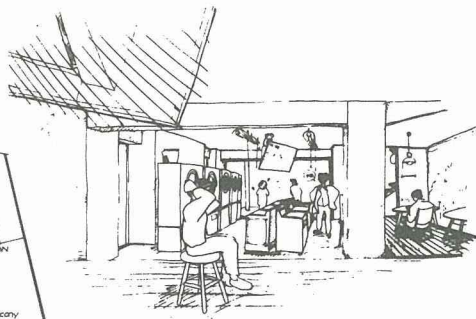
roof



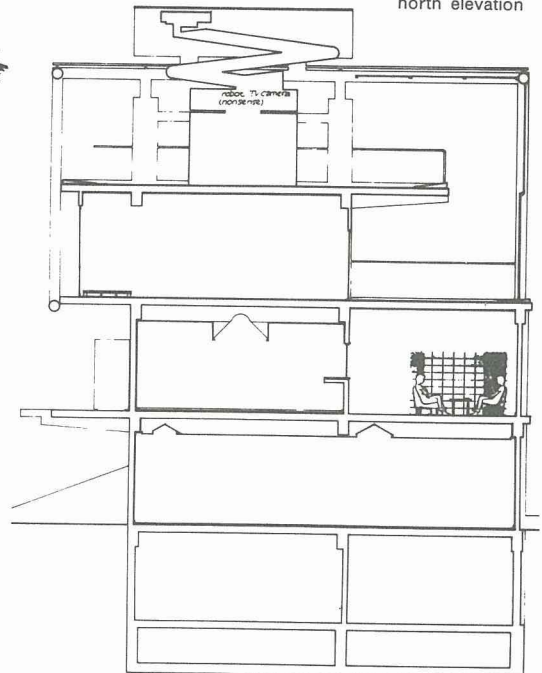
north elevation



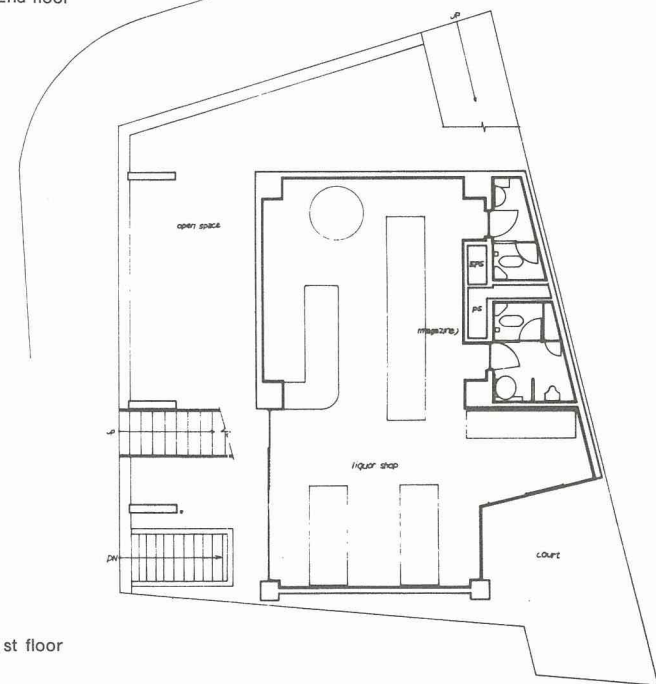
2nd floor



interior



section



1st floor

■大学と駅の前に敷地があるということで、待合わせ場所として使われることが多いと想定した。したがって、これらの人びとの待ち合わせ場所としての機能と、前を通る人びとの休憩場所としての機能をもたせた。■南側には、常時人びとに開放されている空間を設けた。ここは、待合わせ、食事、休憩、そしてランドリーの待ち時間を過ごすために使われる。また空間は上に向かって伸びており、人びとは結果的に屋

上にたどりつくだろう。■屋上は、すっかり建物に囲まれてしまった地上と異なり、四周に開けた空間をもつ新天地である。人びとはこの魅力に気づき、屋上自身が、人びとを引きつける力をもつことになる。この吸引力で、植物が水を吸い上げるように、人びとを吸い上げることができれば、この計画は成功したといえるだろう。■この計画が屋上利用に目を向けるきっかけとなれば幸いである。

project 2

【都市のミュージアム】

Urban Museum

講評

非常勤講師 松永安光

本課題は私がアメリカのワシントン大学に招かれた時に大学院の学生たちに与えたものと同一のもので、学生たちの条件はいささか異なるものの、日米間においてどのような思考の差異がみられるかが大いに興味深かったのである。結論からいえば、テクニックの面では本学の3年生たちは彼の地の大学院生たちとよい勝負であったが、発想の面ではアメリカ側にいささか分があるように思えた。

今回は時間が限られていたので建築における形而上学的方面についての考察を深めることができなかつたのであるが、大学と専門学校の違いは、こういう側面にあるのだと思う。誰もか指摘することではあるが、建築とは人間の生活にあらゆる局面で関わってくるものなので、幅広い視野のもとに展開されるものでなければならない。しかしそれが単なる哲学と異なるのは、そこにテクネー(技)が介入してくることである。

ここに掲載された諸君の作品は、両者のバランスが比較的良好とれているのであるが、いささか後者の比重が高い。他の多くの諸君の中には、思いもかけぬ発想で私たちを驚かせた人びとがあつたが、惜しむらくはそれを表現するだけのテクネーの追及に隙があつた。しかし発想というものはできるだけ遠くに掲げておくべきものであつて、いかにしてそこに到達するかは、その後からじっくり考えればよい。けだしテクネーを学ぶことはできるが、発想を学ぶことはできないのである。



- 第2課題 山下和正教授 松永安光講師 5/21~6/27
- 課題主旨: 東京駅から2kmという距離にもかかわらず、周囲から隔絶された世界をつくる佃島に、既存の美術館・博物館の枠組にとらわれない、ミュージアムを設計する。敷地の分析、建物のプログラムの提案、建築的解決が求められる。
- 敷地: 佃島、縦横に走るメインストリートによつ

- て区画された4つのブロックのうち、ひとつを選ぶ。他のブロックには現在の住人が住んでいるとする。
- 建物: 用途 ミュージアム
延床面積3000m²±10%以内 建蔽率70%, 駐車スペースはサービス用として5台必要。来訪者用駐車は高架道路下を利用する。
- 地域地区: 住居地域、準防火地域、第3種高度地区
- 日影規制: 5時間, 3時間, h=4m

講評

教授 山下和正

佃島という東京でも独特の雰囲気をもつ地域に、何かのミュージアムを設計するという課題である。江戸時代、漁村であつた佃島は、近代になつてもその面影を残していることで知られていたが、観光的再開発もその機を逸し、近年はウォーターフロント開発が、その足元にせまっている。今後のあり方が不透明で、難しい地域である。

したがって、本来ならば果たしてこの地域にミュージアムを建てるのがふさわしいかどうか、まず論ぜられなければならないし、そのためには、この地域の将来像がみえてこなければならない。しかし、この課題はまずミュージアムを前提としているため、この地

にどのようなミュージアムがふさわしいかを慎重に考えてもらう必要があつた。

もうひとつのテーマは、ミュージアムという大型建築と、この地域の景観との対応である。東京の下町特有のフロンテージの狭い町家、細い路地、住吉神社とその参道など、歴史的な名残りのある小スケールの街並みを将来どうするのが望ましいのか、それぞれの設計案の中に反映されなければならないはずである。

このような大きな2つのテーマに対して、十分にバランスよく現実性をもって応えてくれた作品は、残念ながらそれほど多くはなかつた。しかしいっぽう、バランス感覚や現実性はあまりないにしろ、挑戦的、偏執的な力作もいくつかみられ、この点では頼もしく感じた。



松永安光 Yasumitsu Matsunaga

- 1941年 東京生まれ
- 1965年 東京大学工学部建築学科卒業
- 1965年 芦原建築設計研究所入社
- 1972年 ハーバード大学デザイン学部修士課程修了
- 1980年 SKM設計事務所代表取締役就任
- 主な作品: 熊本アートポリス熊本市宮託麻団地(1989~), Y'S court NAKAHARA (1991), 牟礼の集合住宅(1990), 代田の集合住宅(1989)
- 受賞: 第2回JIA新人賞(1990)

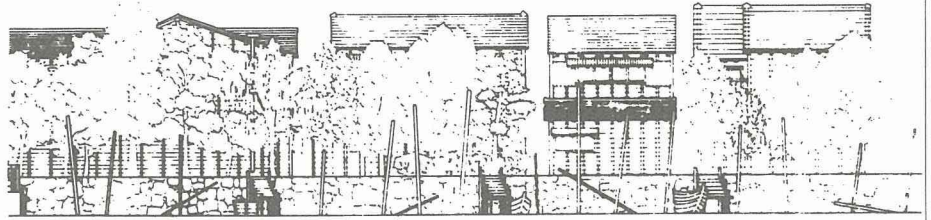
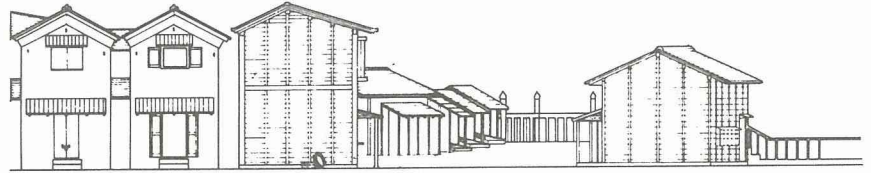
佃島伝統館

絶やしてはならない灯

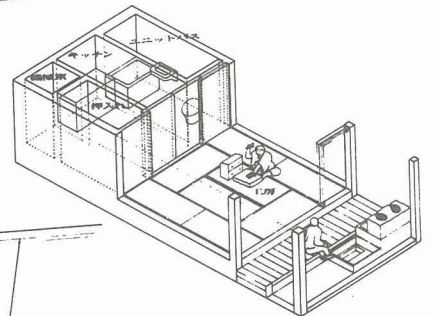
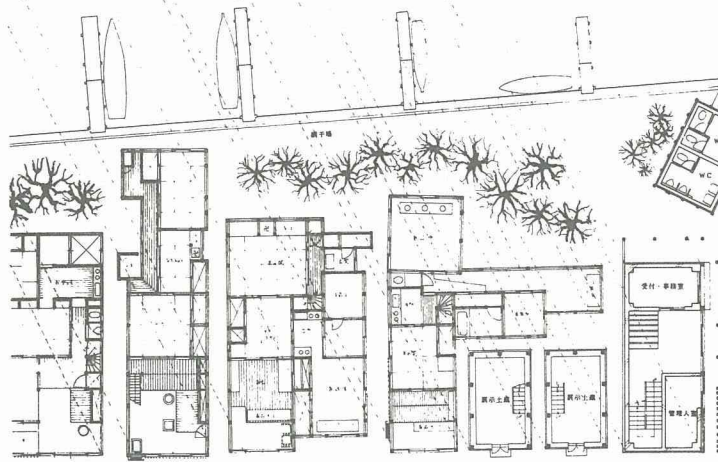
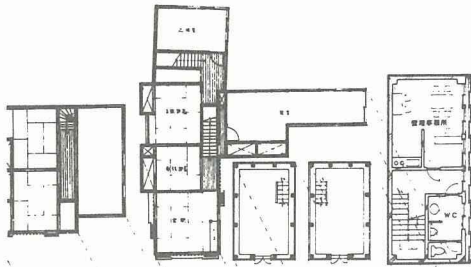
Tsukudajima Traditional Art Museum

関尾英隆

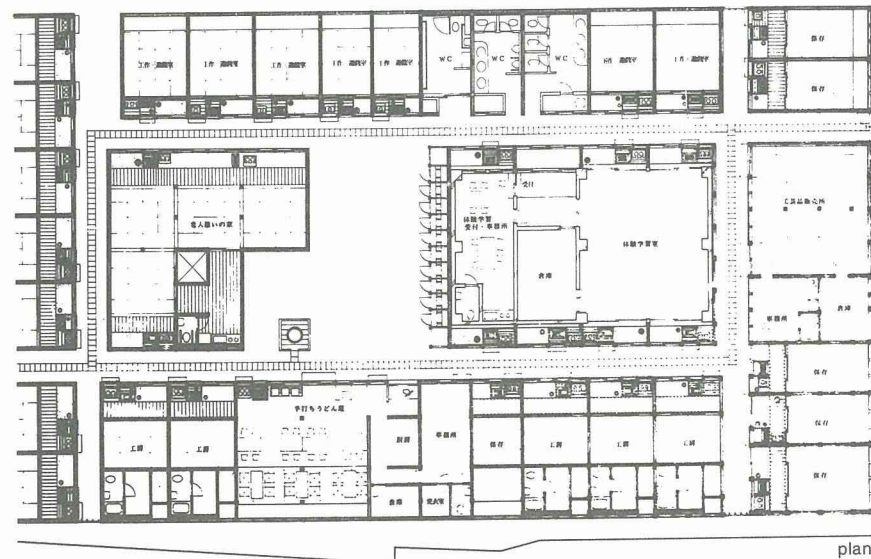
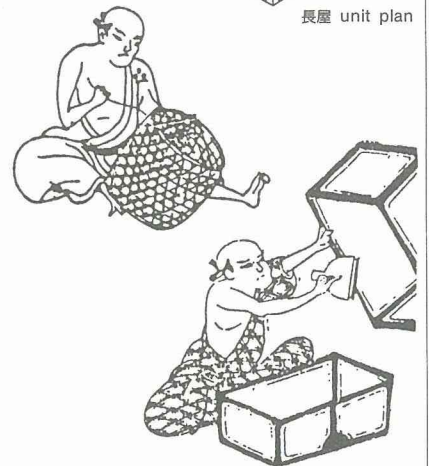
Hidetaka Sekio



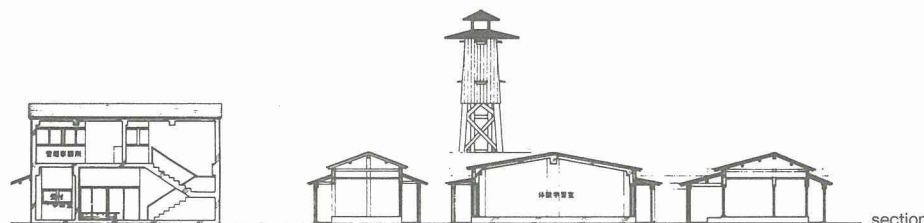
elevation



長屋 unit plan



plan



section

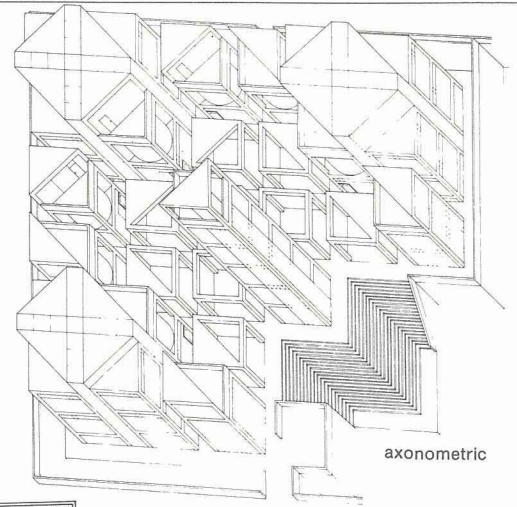
■佃島は、関東大震災と戦災とともにまぬがれ、今なお数々の伝統が残る町である。われわれは、先代が受け継いできたこの伝統を枯らしてはならない。また多くの人びとは、もうミュージアムの展示物を観るだけでは、物足りなくなってきた。そこでここに、今に残る伝統に実際に触れることのできる参加体験型のミュージアムが必要となるのである。■このミュージアムでは、佃島の住宅の特徴である「おもてだいどこ」形式を残した家屋を展示保存するとともに、ユニットタイプの長屋（工房）に職人を呼んで、職人のわざ（技術）を実演公開し、この無形文化の資料保存を行う。職人の工房に囲まれた老人の家では、近所の老人が、訪れた子どもたちに、昔ながらの遊びや手作り玩具の作り方を伝承する。また学習体験室では、伝統工芸品の製作が体験できる。■佃島の伝統技術が、開発という波にさらわれていかないための防波堤の役目を、このミュージアムが果たしてくれれば幸いである。

「佃島おもちゃと子ども博物館」

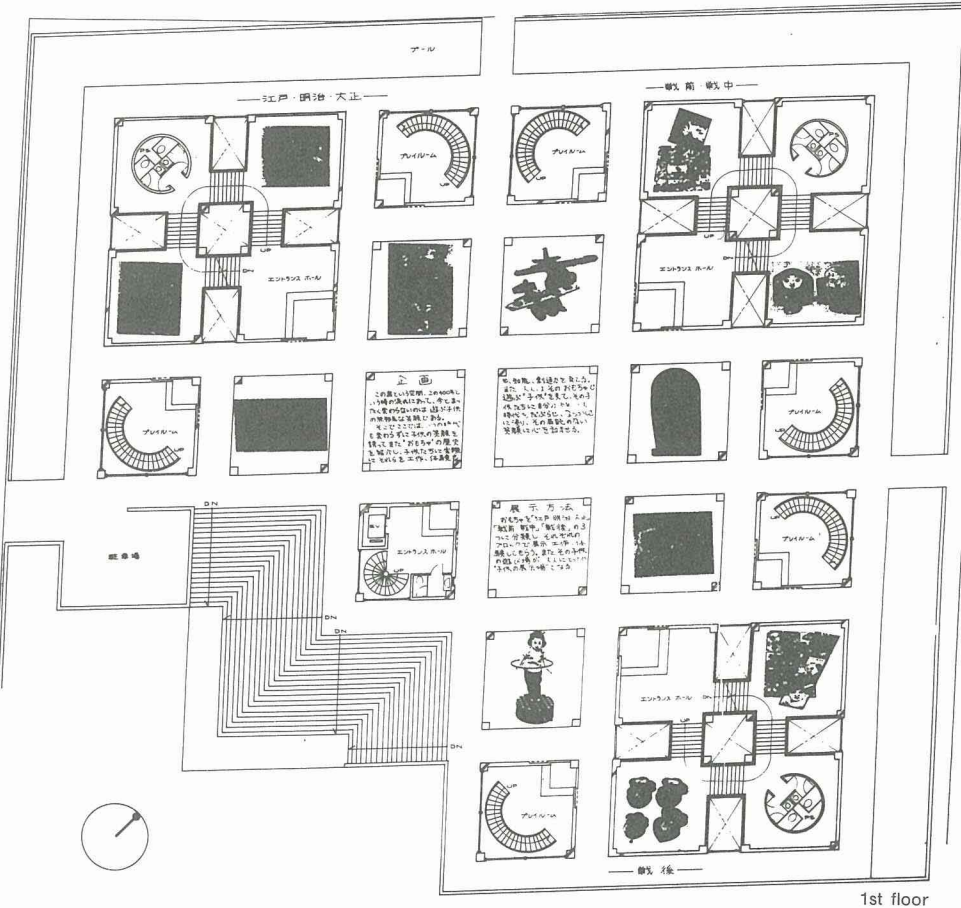
Tsukudajima Children's Museum

江湖猛敏

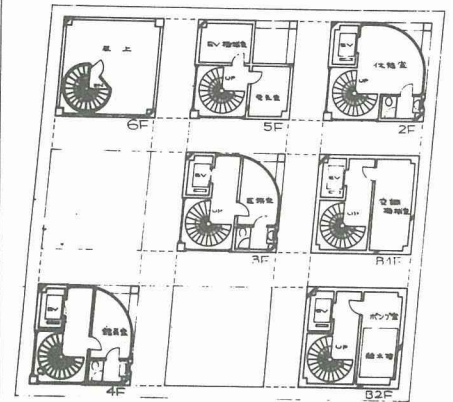
Taketoshi Kohko



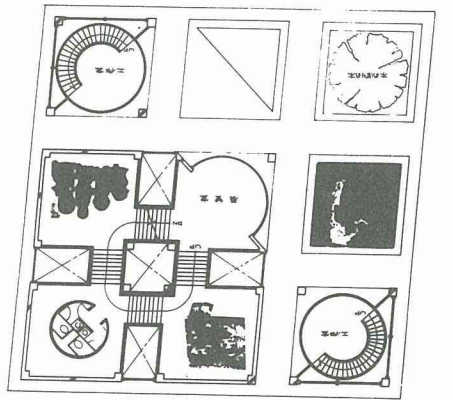
axonometric



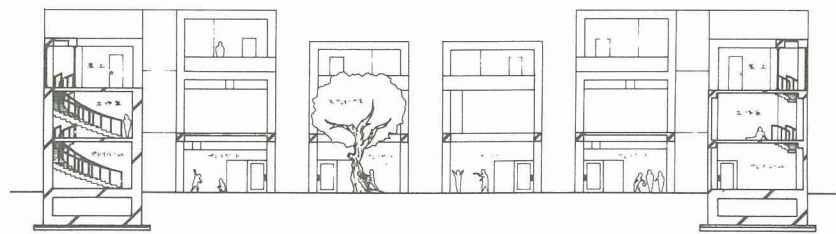
1st floor



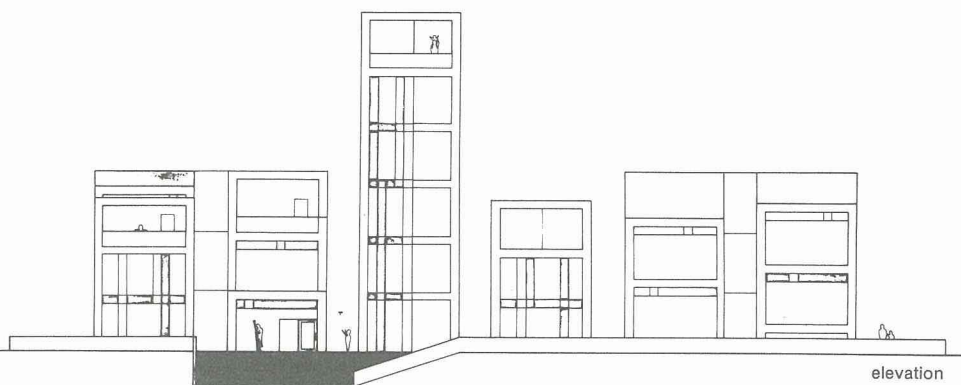
roof floor



2nd floor



section

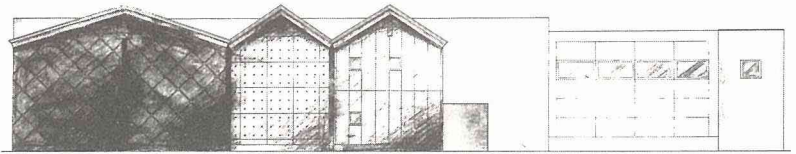


elevation

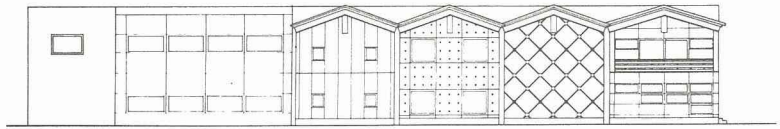
■いつの時代も子どもの遊ぶ姿というもの、愛らしく、われわれの心を和ませてくれる。その屈託のない無邪気な笑顔や、はしゃぐ声などは、時代や遊び道具が変化しても変わることはない。そのことをこの400年という歴史をもつ佃島やその街並み、そして子どもたちは教えてくれる。■そこでこの博物館は、隣接する公園の延長として遊び場を提供し、江戸時代から戦後までのおもちゃを展示、紹介するとともに、実際に工作し遊んでもらうものとした。そして大人たちは、そのおもちゃで遊ぶ子どもたちを見て自分の子どものころの姿をだぶらせ、時を超える。■建築物や路地は周囲の街並みを考慮した大きさ、構成となっている。建物の周りは子どもが遊べる水路で取り囲み、橋を渡して、現在では感じられない島の歴史を象徴する。また館内の随所には展望室が設けられ、フレームに囲まれた“子ども展示場”で遊ぶ子どもたちを眺めることができる。

東洲浮世絵館

Tohsyu Woodblock Print Museum



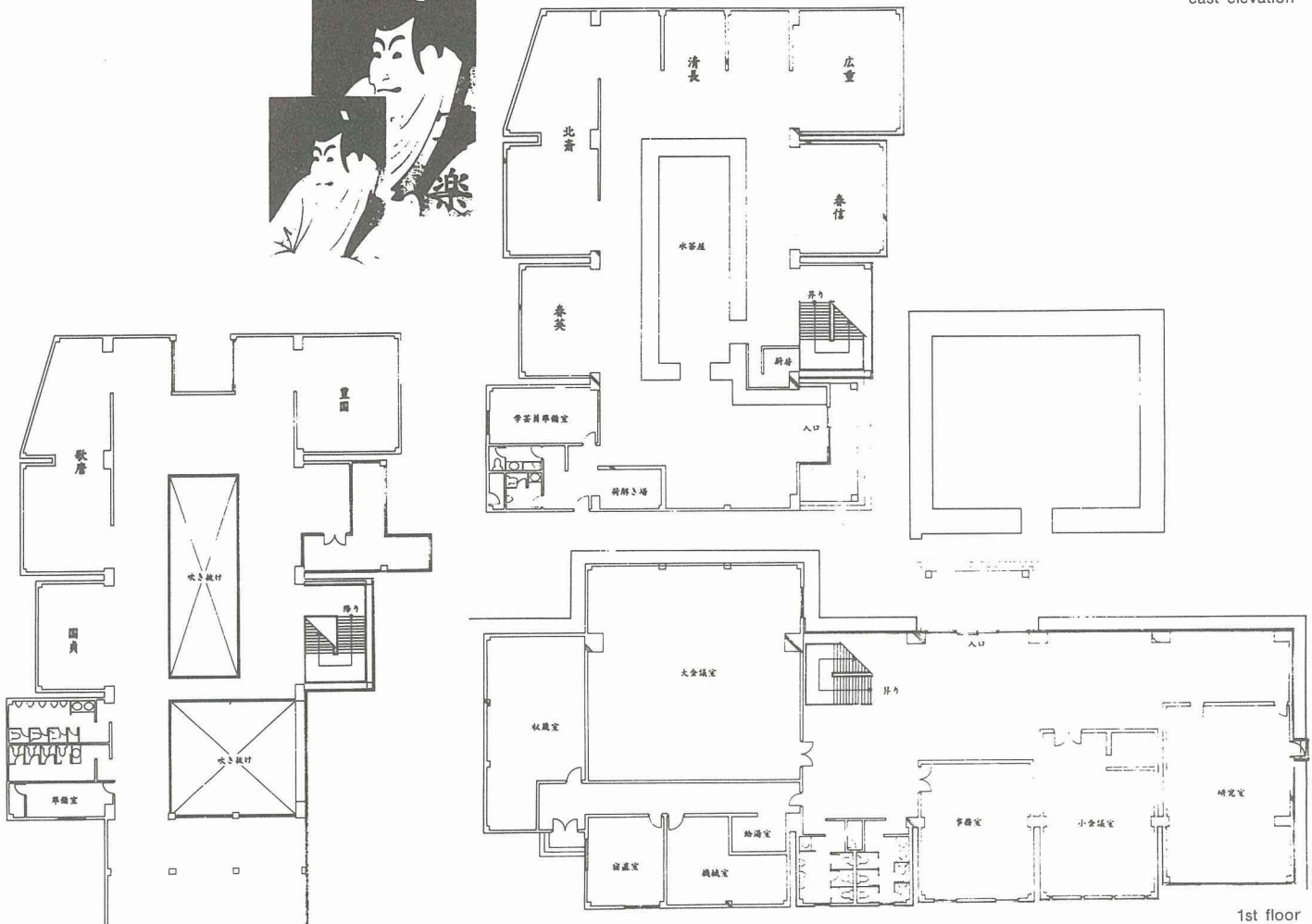
south elevation



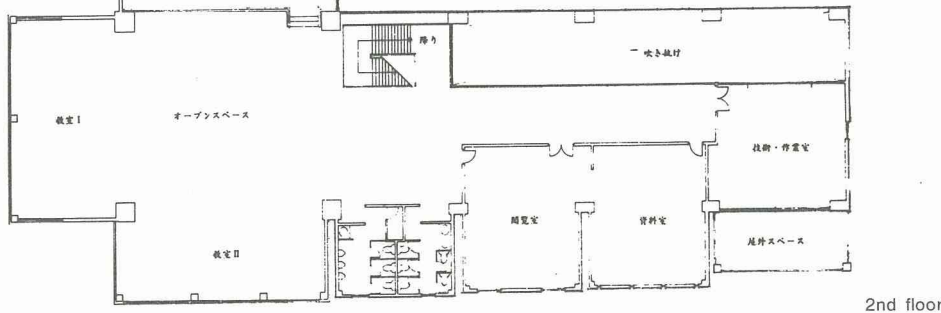
east elevation

原田忠行

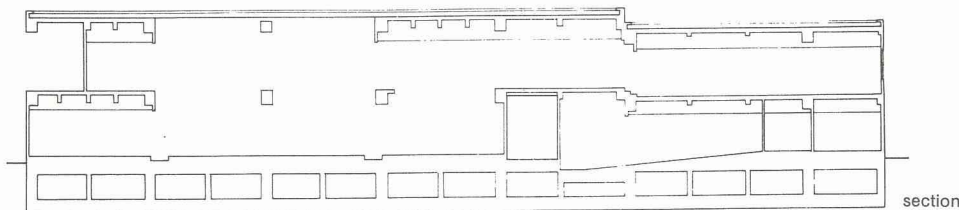
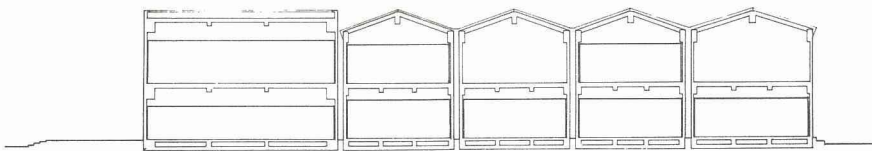
Tadayuki Harada



1st floor



2nd floor



section

■東洲斎写楽、肖像画家として世界的にも有名な江戸時代の浮世絵師である。写楽のことを知らない人はいないと思うが、彼自身は実在したかどうか分からない正体不明の人物である。国内外の人たちがさまざまな説を唱えているが、その中に「写楽は佃島でその生涯をとじた」というのがある。そして佃島の住吉神社には「東洲斎写楽終焉の地」と刻まれた碑が立っている。■この美術館は写楽等の浮世絵を展示する、佃島の人びとのための場所である。人びとはここに集い、茶を飲みながら写楽を楽しむ。美術館は、佃島の顔としてその役割を果たすのである。

project 3

緑に囲まれて住む
四世代住宅

A Garden Town for Four-Generation Families

講評

非常勤講師 石井 修

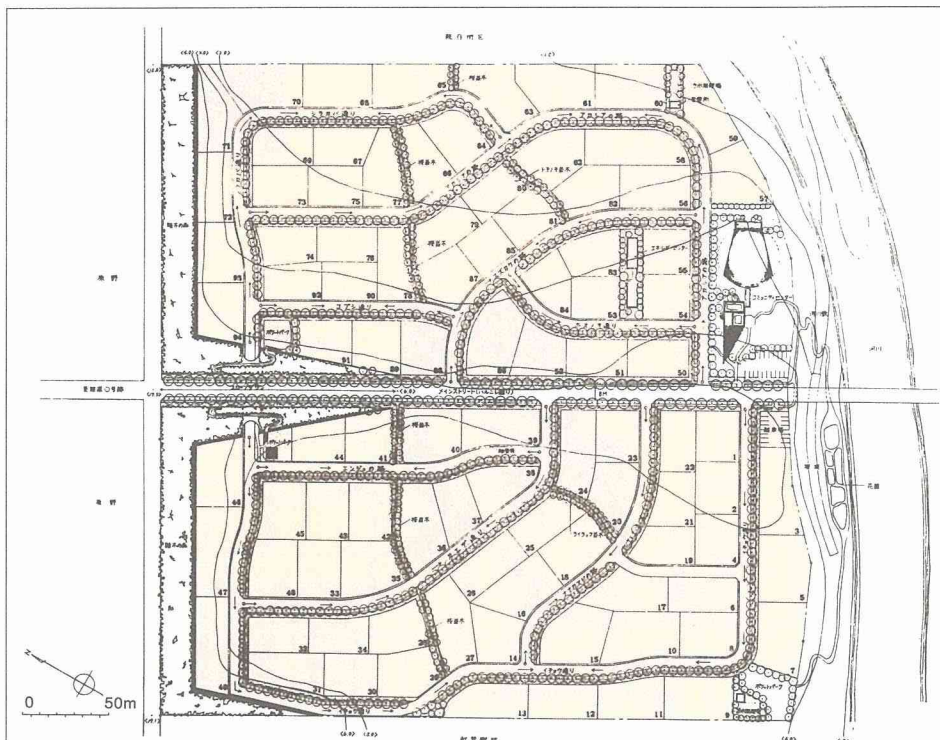
この課題の敷地を北海道にある新しい分譲地に設定したのは、伸び伸びとした自由な発想ができるようにと考えたからである。1戸当りの敷地を300坪前後、延床面積も100坪以上、欧米の住宅レベルに決して劣らない自分の住まいを考えてもらい、また向こう三軒両隣りの住宅を同時に設計することによって学生諸君の環境に対する考え方も確かめたかった。現実的でなくても、若い世代の思っている新しい暮らし方が、図面の中にどのように投影されるのかもみたかった。

60人近い一人ひとりから提示された計画案を短時間でみたこともあって、見落としたり理解できなかったりしたかもしれないが、私が密かに期待していたような新しい住空間の提案をみつけることはできなかった。

ここに掲載されていない木村君の案を、私なりに相当高い評価をしたが、スケッチのような図面であったので、もっと煮詰めて第三者にもその意図が適確に伝わる表現をしてほしかった。

個々のプランニングの良し悪しも重要な評価の基準であったが、それ以上に家がつくられることによって住宅地全体が緑に覆われた美しい場所になるように考えられているかどうかを優先させた。また、室内と庭のつながり、気候風土との対応、各世代の暮らし方なども評価の対象とした。

星野さんの案は無難によくまとまっているが、よくありがちな注文住宅のようで、楽しい生活の匂いに乏しい。もう少しシンプルで伸び伸びしたプランニングをしてほしかった。



choice of site

- 第3課題 山下和正教授, 石井修講師
7/2~9/5
- 課題主旨:住み継いでいくことのできる、ゆとりのある住まい、そして緑が育つ美しい街並みというテーマのもとに、両親・祖母との同居可能な四世代住宅、および向こう三軒両隣の家、計6軒の住宅を設計するものである。
- 敷地:北海道の中都市近郊の住宅地、別図の区画から

- ら向こう三軒両隣のある6区画を自由に設定する。区画面積200~350坪 各戸に温泉水が供給される。
- 建物:延床面積(1戸)100~130坪、高さ10m以内、建蔽率30%以内、壁面後退は道路から5m以上は設けないこと。車2台、メインストリートからの進入はできない。向こう三軒両隣の家族構成は自由に設定してよい。

課題の条件から逸脱しているのを承知の上で佐倉君の案を選んだのは、北海道特有の風土に対する考え方、緑と土に埋もれた自然との共生を試みた提案を評価したからである。また足立君の案は、緑に囲まれていて気持ちよい戸外生活のできる家で、大浴場もあって楽しいが、道路から玄関にいたるアプローチと車庫のあり方にもう少し工夫がほしかった。

講評

教授 山下和正

この課題は、次の3つの小課題で成り立っているように思われる。まず道路をはさんだ両側の景観設計、次に建物を含む敷地全体の配置設計(6軒分)、最後に住宅自体の設計である。主なテーマは石井先生が長年取り組

んでこられた「住環境と自然との共生」である。敷地は、先生自身が実際に計画中の北海道の住宅開発地を想定し、現在のわが国の水準からみれば恵まれた与条件であった。

建築のデザインは「住宅に始まり住宅に終わる」といわれているように、建築家志望の学生は、いつも住宅デザインを原点のテーマとして持っているべきだと思っている。何故なら、住宅は日常的に接する建築であるため、いつも考え続けるのにふさわしい対象であるからである。今回の課題は、原点の常識を試される部分がかかなりあったと思われる。結果は、自分が住むという視点を欠いたものがかかなり多かったし、建物以外の庭、外構、植栽といったランドスケープにあまり学生諸君の目が向いていないのも気になった点である。



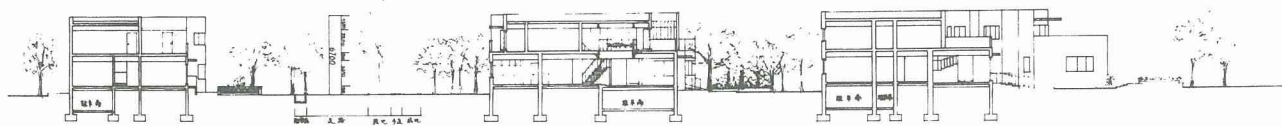
石井 修 Osamu Ishii

- 1922年 奈良県生まれ
- 1940年 吉野工業学校建築科卒業後、大林組・東京支社勤務
海軍建築部および陸軍航空隊に応召、大林組退職後、工務店自営
- 1956年 美建・設計事務所を開設
- 1985年 第1回兵庫県みどりの建築賞受賞2件
- 1986年度日本建築学会作品賞受賞 第12回吉田五十八賞受賞
- 著書:「家」(学芸出版社刊 1984年)共著、「住空間と緑」(住宅建築別冊34)

緑に囲まれて住む四世代住宅

A Garden Town for Four-Generation Families

星野有紀
Yuki Hoshino



section



"my own house" 1st floor

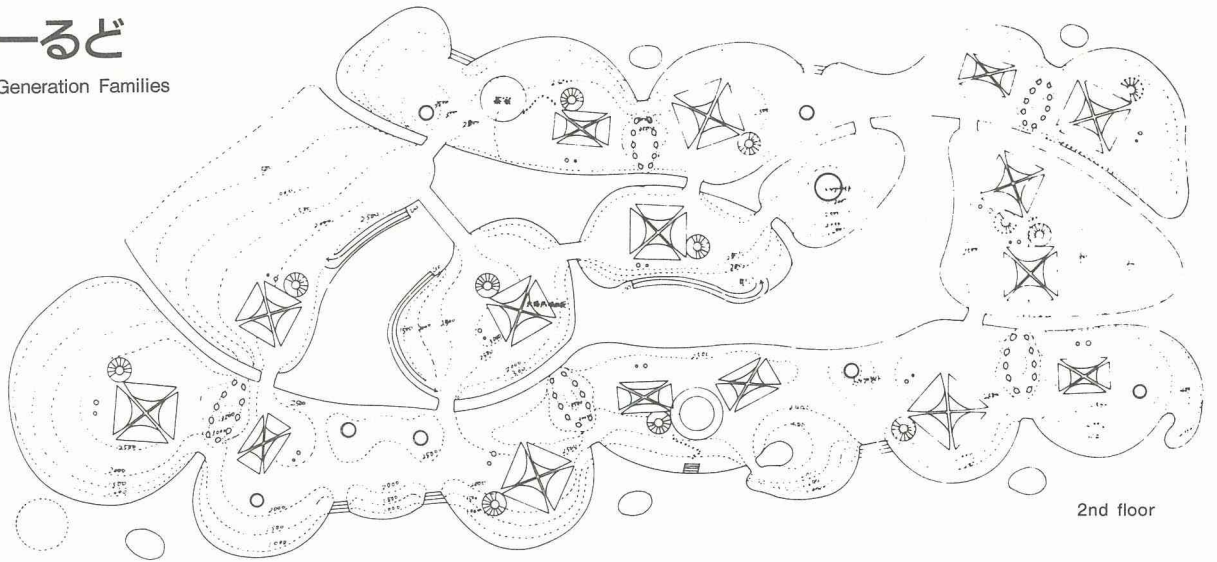
2nd floor

■この住宅街を設計するにあたって、まず個々の住宅を機能的につくると、住宅街としての全体的な姿を、相互の家の関係をふまえてつくることの2つの点から考えてみた。■最初に考えたのは後者で、敷地選定の時ここに重点をおいた。具体的には日照とプライバシーについて、建物の影が自宅の庭、さらには隣家の庭や建物におよぼす影響を考え、植栽や庭の設計の際に、閉鎖的にならない適度なプライバシーを守れるようにした。■次に前者は、後者の考えと連動させ、生活のパターンから、各々の部屋の機能や性質による相互の位置関係、さらには家の内側および外側に対するプライバシーに重点をおいて設計した。■そして、家の内と外との関係も、庭と部屋とのつながりや、エントランスの位置、テラスへの開口部などを決定する上で、重要なポイントとなった。また、大きな敷地をいかに有効に利用するかが、大きな課題となった。

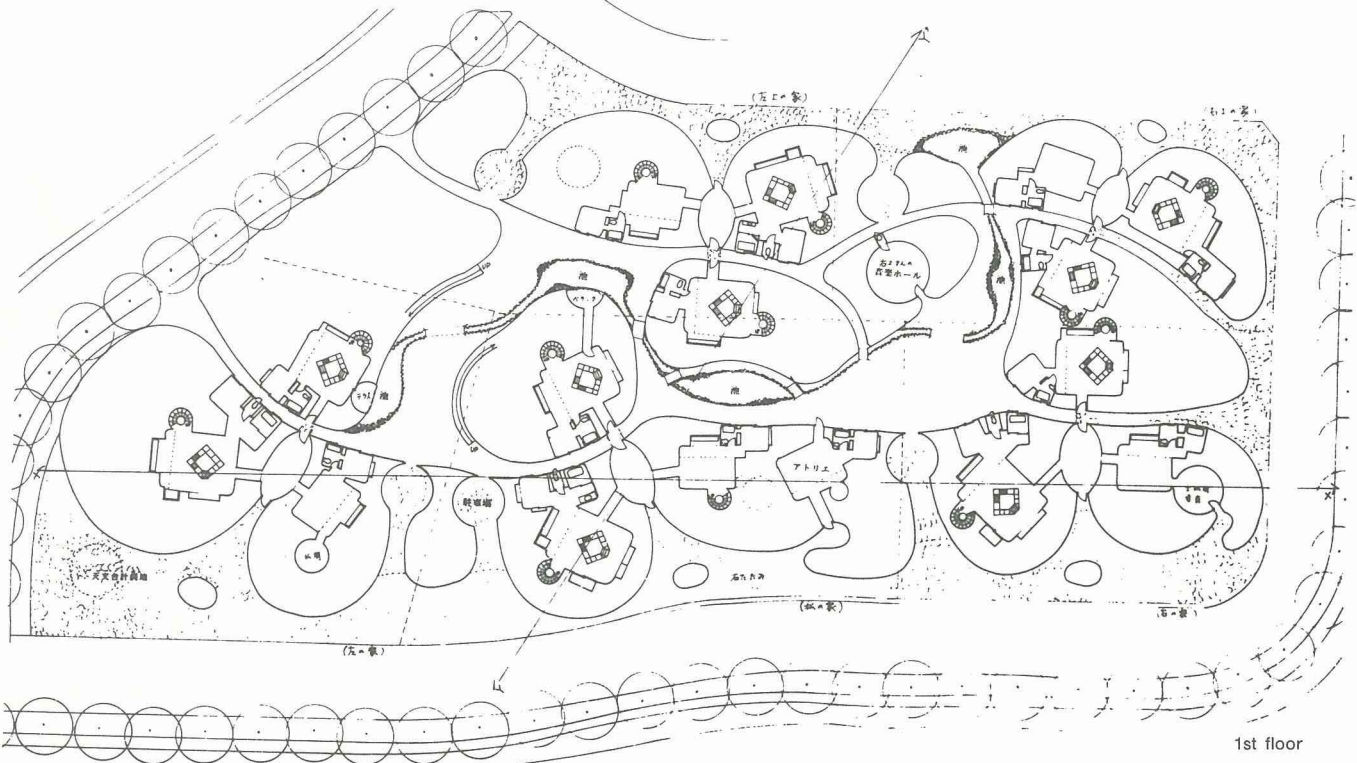
四世代わーるど

The World of Four-Generation Families

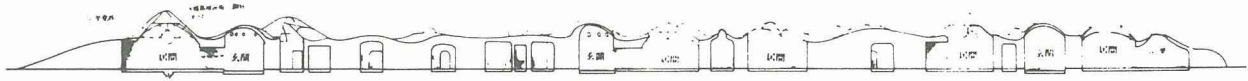
佐倉浩之
Hiroyuki Sakura



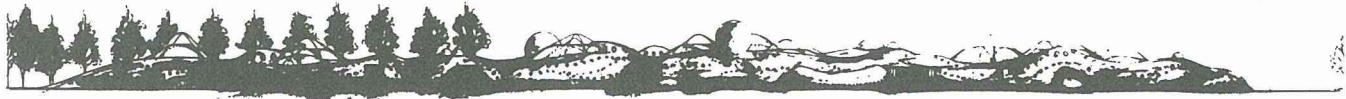
2nd floor



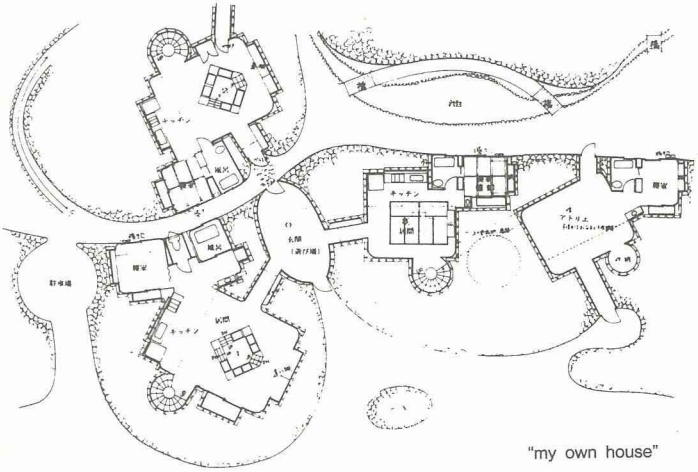
1st floor



section



elevation



"my own house"

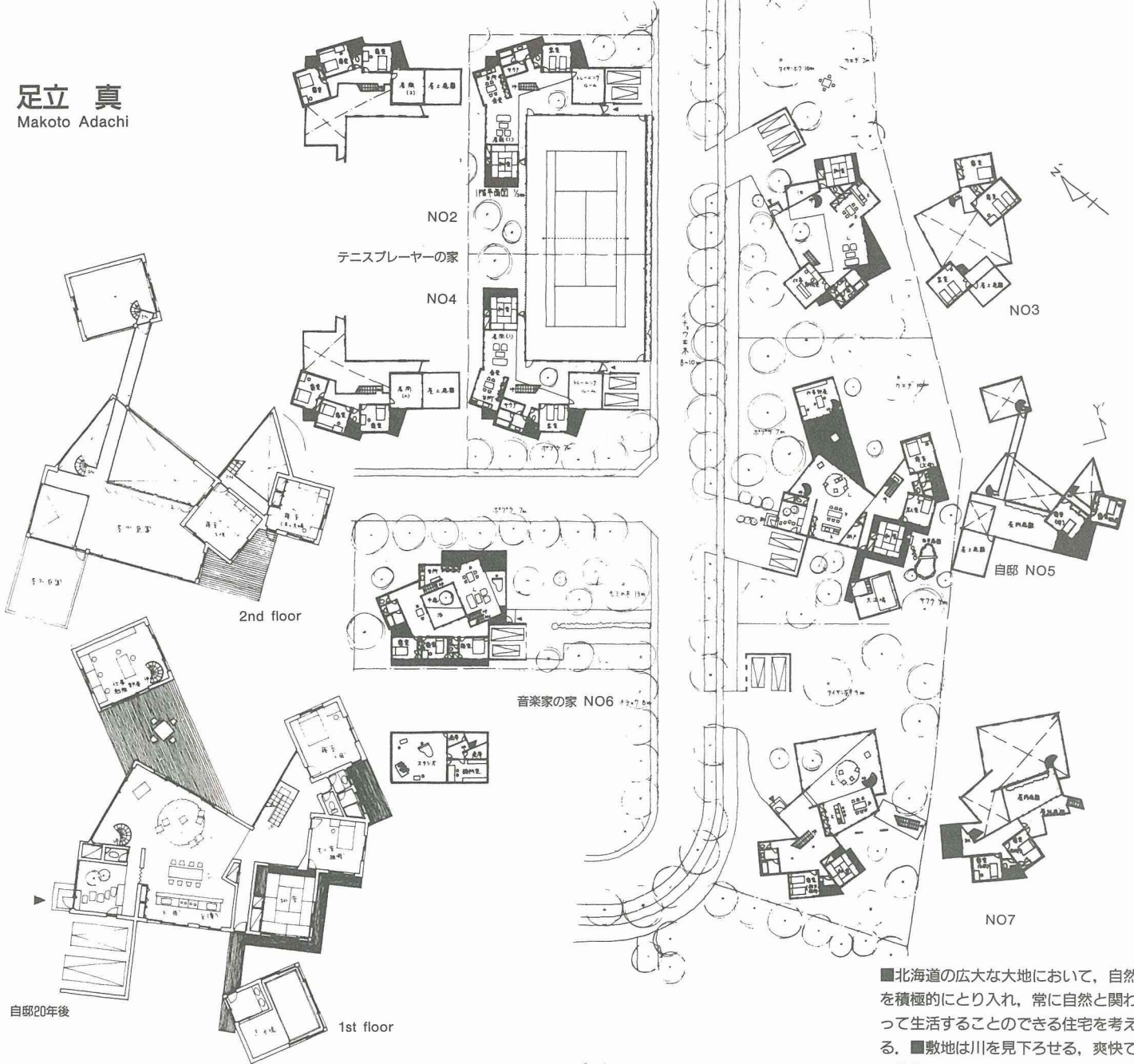
■住宅の記憶を長く引き継ぐであろう子どもたち。北海道の広大な敷地の中で、彼らが自然と住宅のつながりを、また四世代のつながりを肌で受け入れられるように設計した。■住宅群は、ある時期にはそれ自体が花畑となって虫を呼び寄せ、やさしく語りかけてくれるであろうし、ある時期には禿げ山、草山となって厳しい自然をそれとなく感じさせてくれるであろう。土地は生きている。その中で生活するわれわれ

も、お互いのつながりの中で生きている。■つながりといえば、開けた敷地の内部に広がる池もまたつながっていて、その中のあるじ、魚は、エサをくれる主人の家に群がる。いささかけんきんではあるが、彼らもまた生きている。かわいそうに彼らは時として野鳥に食われる。魚だからしかたない。■大いなる自然の営みの中で、子どもたちは何を感じてくれるだろうか。

緑に囲まれて住む

Living Surrounded by Greenery

足立 真
Makoto Adachi



■北海道の広大な大地において、自然を積極的にとり入れ、常に自然と関わって生活することのできる住宅を考える。■敷地は川を見下ろせる、爽快で開放的な場所を選んだ。プランにおいては、軸線を振り、テラスを多く用いることによって、あらゆる方角の景色を楽しむことができるようにした。そばを流れる川、緑溢れる街並み、さらには隣の家の庭までが、わが家の庭のようである。■また、居間と連続させて住宅の内部にも自然をとり入れる。この庭は年間を通して緑を提供し、第2のリビング・ダイニングとして、生活になじみ深い空間となる。■自邸は四世代住宅であるが、世代の違いを考慮しつつ、四世代まとまっの団らんが繰り広げられるような住宅を提案した。他の5軒も入居家庭のライフスタイルを設定し、それに合わせた居間中心型の住宅を考えた。■住宅をシェルターや容器であるよりも、家庭生活の場であり拠点であると考えたときの解答がこれである。

建築設計製図第 I (2年生)

This year's 2nd-year drawing class objectives : Spring term

内藤 昌 (建築計画第1講座・教授) ・ 藤岡洋保 (同講座・助教授)

Akira Naito, professor・Hiroyasu Fujioka, associate professor, (Architectural Planning Section I)

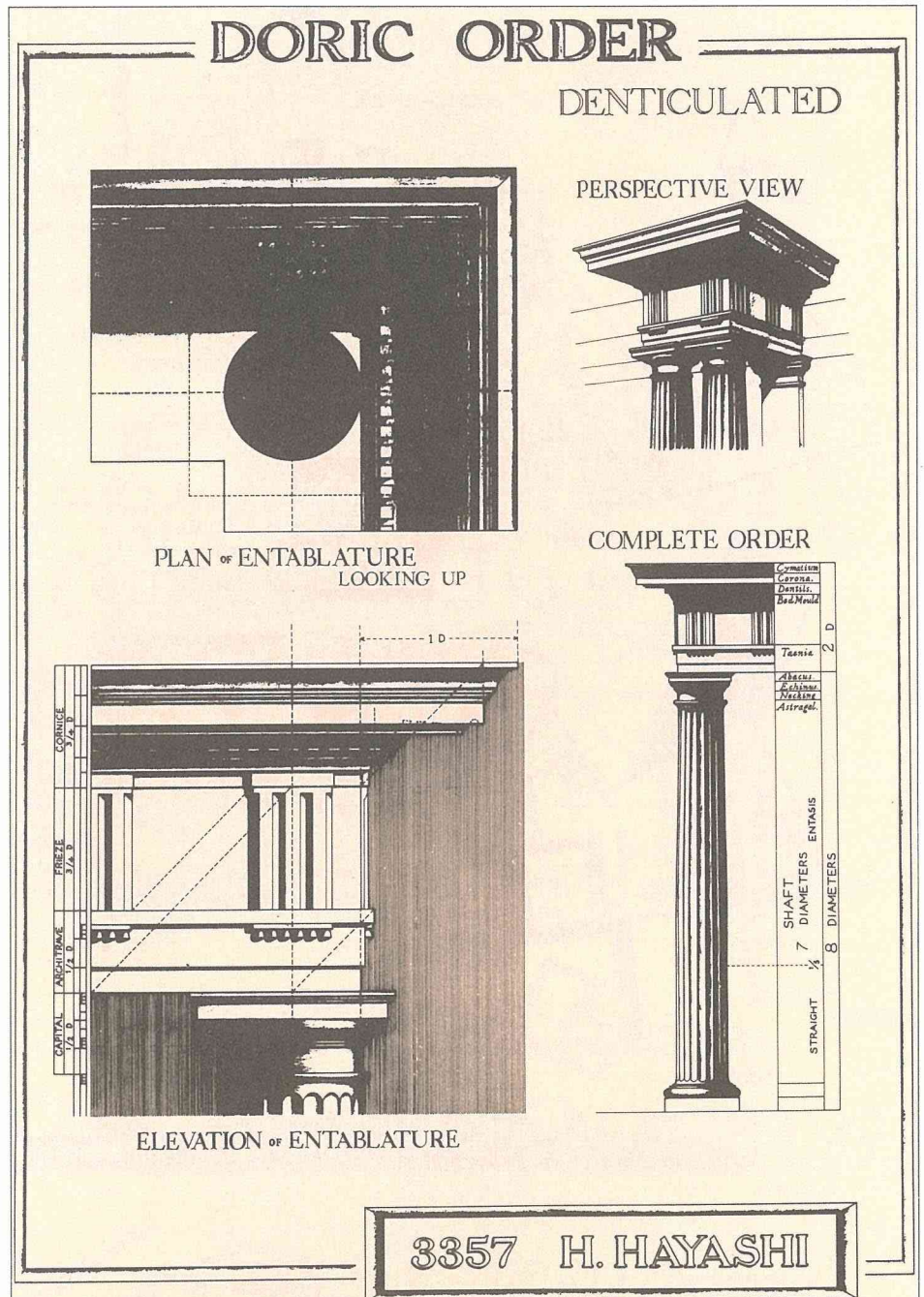
日本の大学における建築学体系の成立は、「国家の枢要に^{うんめい}応ずる学術技芸を教授し、及其^{うんめい}蘊奥を研究する」(『帝国大学令』)によって、産業革命後のヨーロッパで成立した建築学を専一に導入したことによる。初代教授コンドル (Josiah Conder 1852~1920年) の教えを受けた辰野金吾がヨーロッパに留学した際、コンドルの恩師バルジス (William Burges 1828~1881年) に、「西洋の建築を学ぶこともよいが、まず日本のそれを知らねばならない」(意訳) と懇々と諭された逸話がある。

要するに建築学教育の根幹には、古典様式習得を正統とすることがあり、少なくとも日本では、西洋古典様式と同様に日本古典様式の理解と修練が求められたわけである。

以来この伝統に則り、第二次世界大戦前までは、大学教育の常識として継承されてきたわけであるが、戦後いわゆる機能主義建築全盛にあって、次第にその正統性を弱めていた。

しかしながら、そうした機能主義の主張も、ポストモダニズムの歴史相に埋没する昨今、改めて古典建築の学習を基幹とする正統性を意識するようになっていく。

そこで本学の建築設計製図第 I では、まず古典様式を第 1 課題において西洋のオーダーで、第 2 課題において日本の木割であつかうこととした。そして第 3 課題において、主として木造の構法理解をふまえた別荘 (小住宅) の設計を行っている。



第 1 課題：西洋古典建築のオーダー Drawing Problem 1

第 1 課題：ドーリック・オーダー 林 宏規

DORIC ORDER Hiroki Hayashi

第 2 課題：主殿古法木割 剣持知明

Traditional modular coordination

Tomoaki Kenmotsu

第 3 課題：太平洋を望む別荘 林 宏規

Villa overlooking the Pacific

Hiroki Hayashi

●テーマ設定

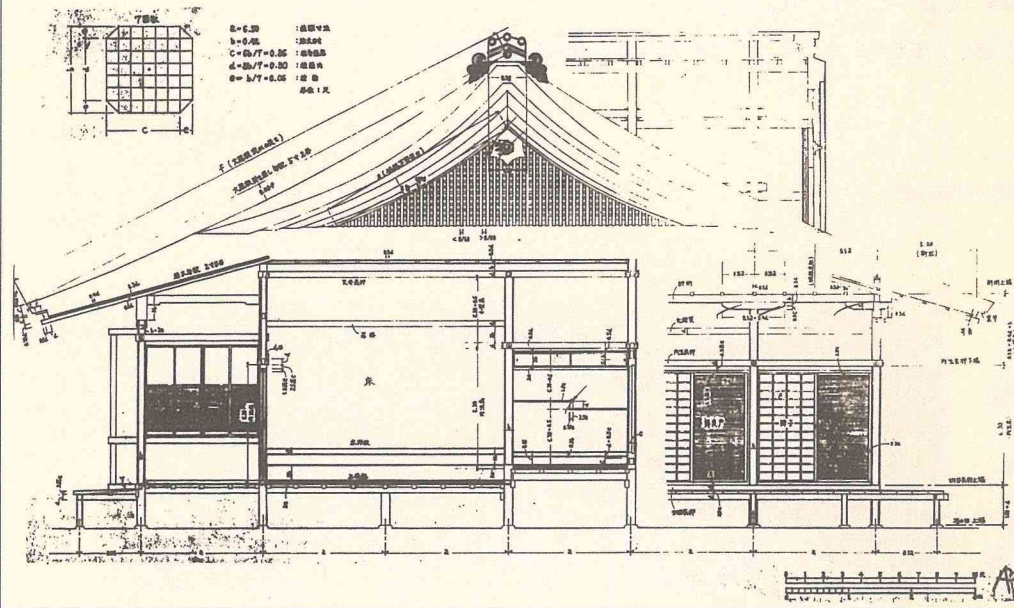
古代ギリシャから西洋建築で用いられてきたオーダーについての理解を深めるとともに、線の使い方・陰影のつけ方などを会得させることを目的とする。なお、製図に先立ってオーダーに関する講義と横浜の関内地区に残る洋風建築 (オーダーを用いたもの) の見学をそれぞれ 1 回行っている。

●所用図面

ヴィニョーラが描いた 3 種のオーダーの平面図・立面図・詳細図・透視図のコピーを配り、そのうちのひとつのオーダーを自由に選び、B2 ケント紙 1 枚にそれらをまとめて描く。使用画材やレイアウトは自由。ただし必ず陰影をつけ、タイトルと氏名・学籍番号をレタリングすること。

第2課題：日本古典建築の木割

Drawing problem 2



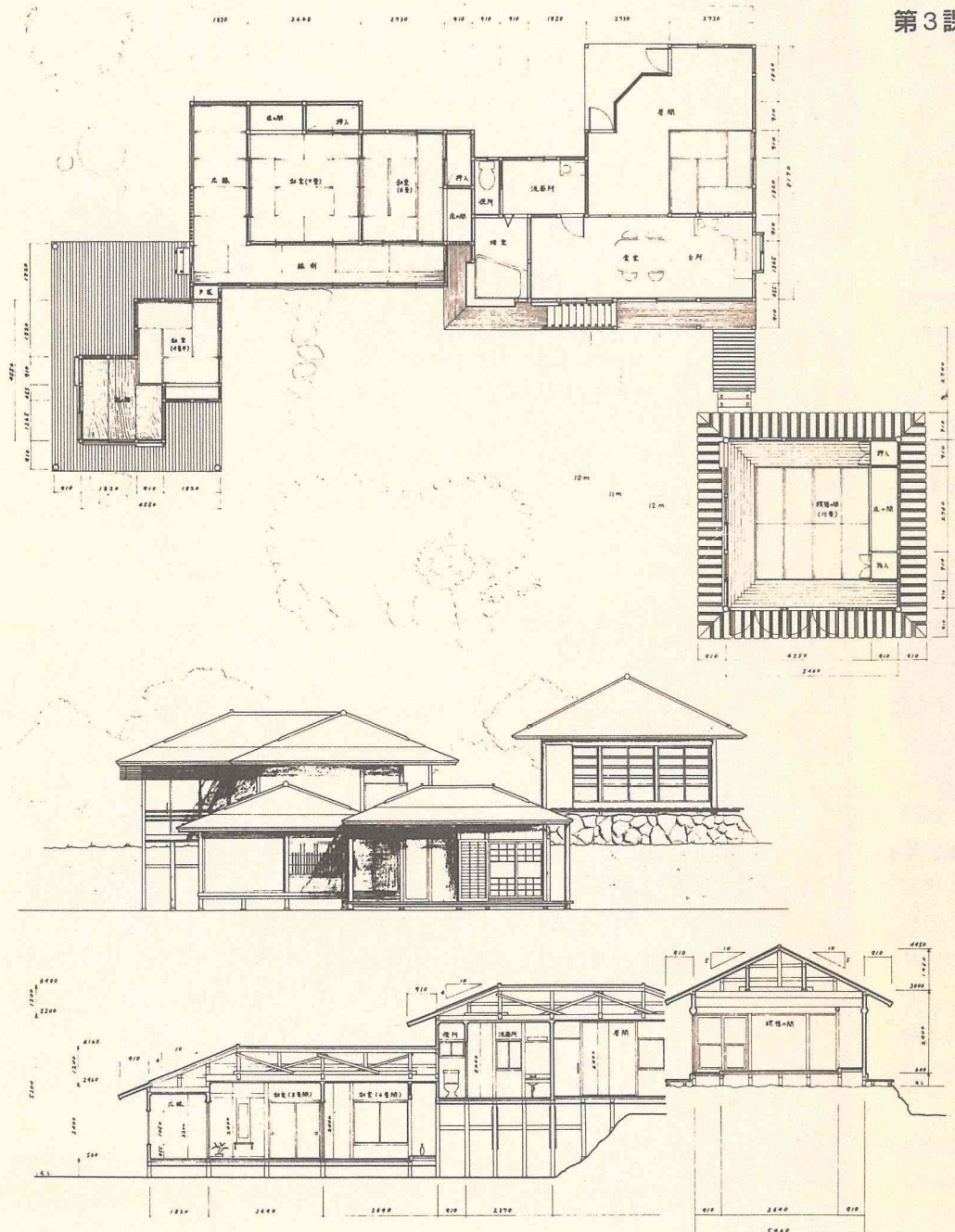
●テーマ設定

『匠明・殿屋集』(1608年)掲載の「屋(住宅)」の図をコピーすることを通して、日本の伝統的な住宅の設計方法や意匠についての理解を深めることを目的とする。なお、製図に先立って木割に関する講義と護国寺月光殿の見学をそれぞれ1回行ってあり、さらに製図に関しては設計のシステムを確認しつつ進めるように指導した。

●所用図面

配付の図をもとに、A1美濃紙1枚に鉛筆仕上げ(硬い鉛筆はできるだけ使わないこと)、縮尺は1/20、タイトルと氏名・学籍番号は日本語でレタリングすること。細部の図などを加えてもよい。

第3課題：別荘 Drawing problem 3



●テーマ設定

岡倉天心(1863~1913年)は、日本の伝統文化、とりわけ日本美術を海外に紹介し、日本画の近代化をはかった業績は限りなく大きい。若き日はフェノロサに師事、明治23年(1890年)東京美術学校(現東京芸大)校長となり、横山大観らを育て、のちに日本美術院を創設する。『東洋の理想』をかかげて、『亜細亜はひとつなり』を説き、英文の著書『茶の本』は、今日でも世界的に有名である。

その天心が、晩年隠棲したところが五浦海岸(北茨城市大津町)で、低迷期にあった日本美術院をここに移し、その深い学識から「東洋の理想」を考え、「亜細亜はひとつなり」を説いた理想の地である。太平洋の荒波が岩礁に散る男性的風景の海岸で、50m程ある大絶壁に入江が深く切込み、その先端の小五浦岬に、天心思索の道場ともいうべき「六角堂」が建つ。現在は茨城大学五浦美術文化研究所となっており、松林に天心の墓がある。

ここに、木造の別荘を企画するもので、天心と同じように、日本の伝統文化が如何にあるべきかを瞑想するにふさわしい別荘を設計せよ。

●設計条件

木造で、延床面積150~200m²程度の別荘。敷地は、別図の通りで、常時4人程が適宜生活できればよいが敷地の高低差を利用した階段を設けること(ディテール学習のため)。

●所用図面

- 図面はB2セント紙に仕上げる。
- ①配置図(1階平面図を含む)1/50、2階を設ける場合は図中表示すること。
 - ②立面図(梁間・桁行面各1面、計2面)1/50
 - ③断面図(梁間・桁行面各1面、計2面)1/50
 - ④詳細図(矩計図、1面)1/20、必ず階段部を含むこと。
 - ⑤透視図(1面以上)

建築史特論第2(大学院)

Architectural History Special Lecture 2 (Postgraduate Level)

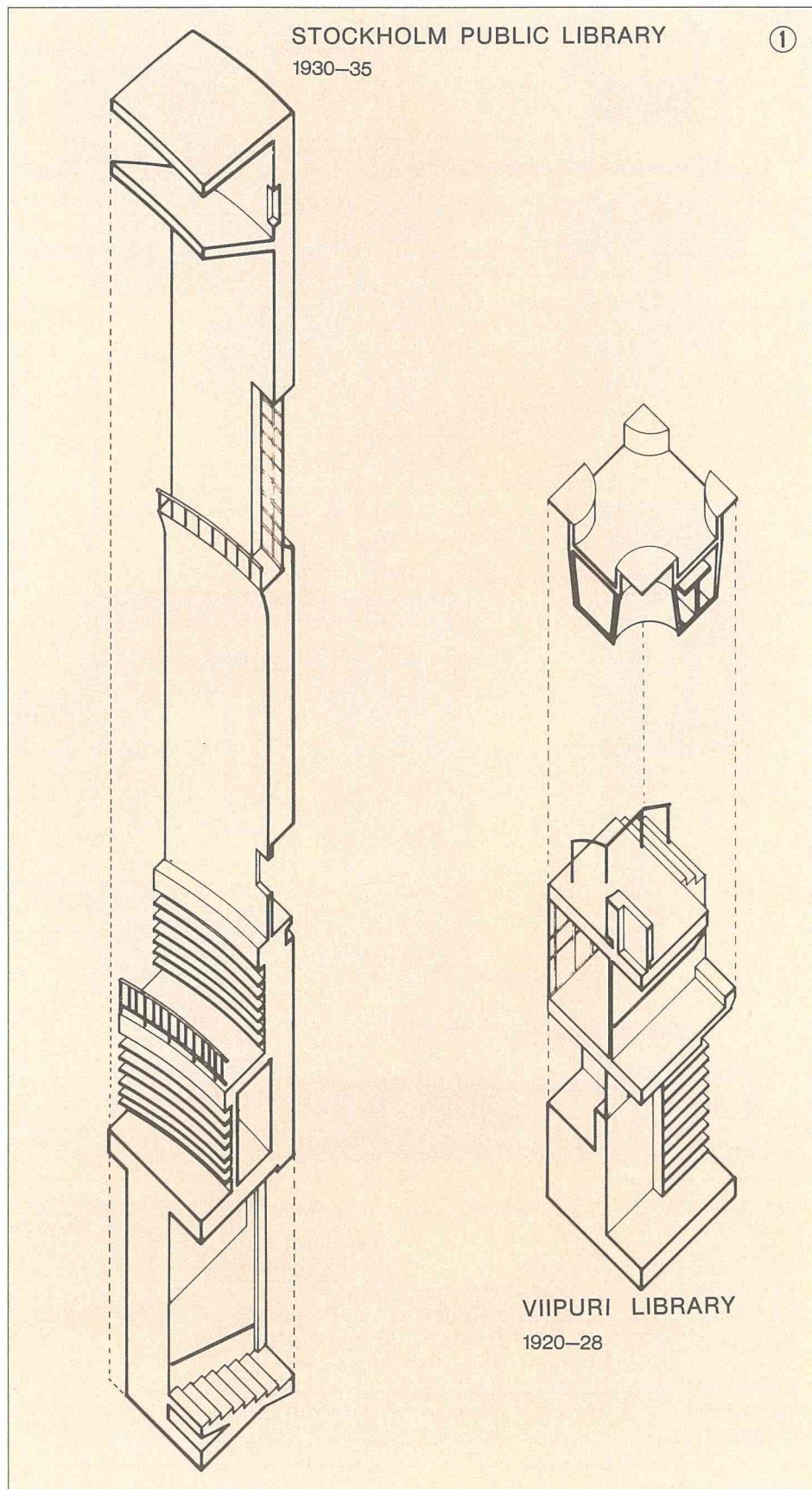
デビット・スチュワート (工学部外国人専任教師)

David Stewart

本年度の建築史特論では、フィンランドの建築家アルヴァ・アアルト (1898—1976年) をとりあげ、彼の作品とその理念について学ぶため、P. D. ピアソンの著作“Alvar Aalto and International Style”を参考に講義を行なっている。授業は建築専攻の修士1年生を中心に、毎週月曜日の午後にかけており、前期の内容は先の著書にならってアアルトのトウルク (Turku) での活動を中心としていた時期からヘルシンキにその拠点を移した頃まで (1927—33年) の作品を年代順に追ってきた。著者はアアルトの初期の活動を“Aalto and Finland Come of Age”, “Aalto Discovers a New World”, “Beyond Functionalism”などの章の中で説明しており、特に後者はアアルトのヴィプリ (Viipuri—現在はソ連の一都市) 図書館の設計競技案から、改定案、最終案にいたるまでの過程を著わしている。フィンランドは1917年に独立したばかりで、この時期は国家としてのスタイルを新たに探究し始めている時であった。特に2つの世界大戦に挟まれている間、ほとんどの主要な建設計画ではイデオロギーを極端に重要視するような競技会が開かれた。

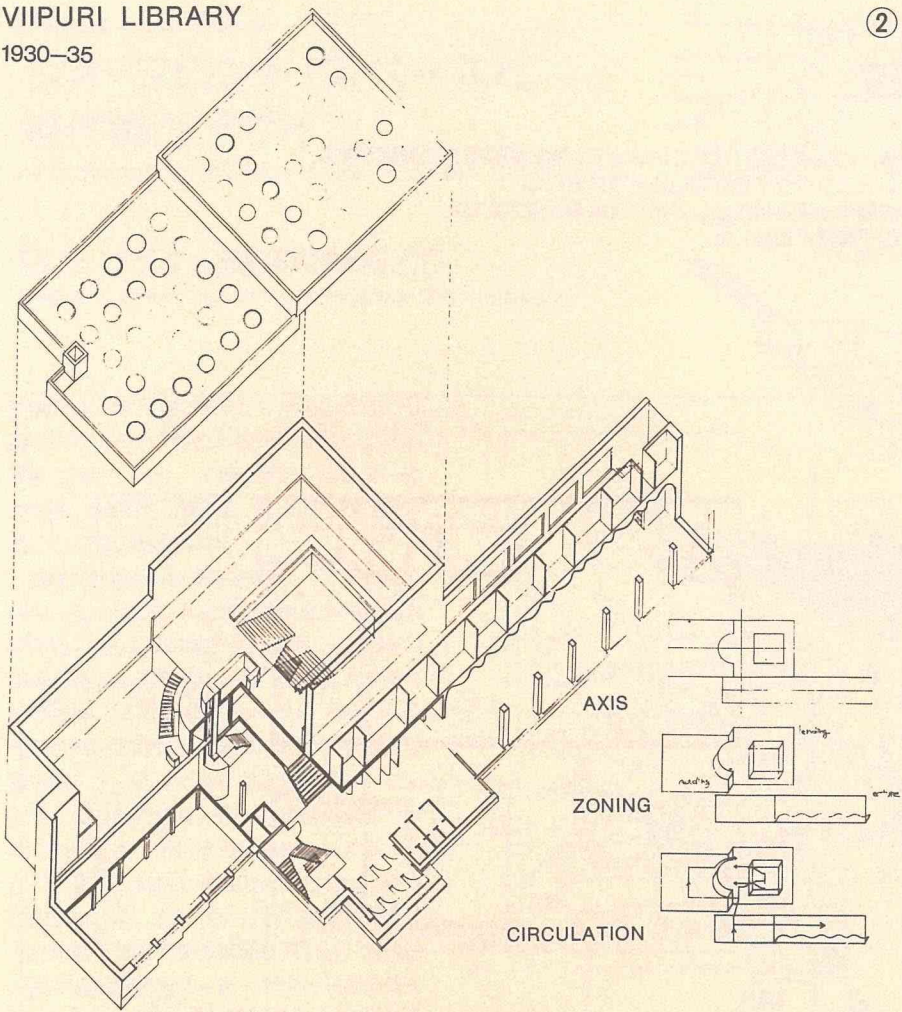
アアルトの設計したその図書館の原案は、グンナー・アスプルンドのストックホルム図書館の新古典主義的な面から強い影響を受けており、それらは貸出ホールの高い天井や、エントランス部のモニュメンタルな階段、図書館を囲む植栽などにみることができ、1928年、敷地がヴィプリ市内の他の場所に移ったときも、アアルトは元のプランの要所を保持した設計案をつくる。しかもここでは新古典主義的なディテールは排され、ル・コルビュジエの引用とも思える連続窓など、いくつかの特徴がみられるようになった。1929年にアアルトは、さらにいくつかの変更を施し、古典様式と国際様式とを混在させた形で第3案を提案している。1933年、市議会が敷地を変更したとき、アアルトは第4案を提出し、これが決定案となった。工事が始まったのは1934年であり、図書館が開館されたのは1935年の秋になってからであった。

この作品にみられるアアルトの表現方法は、

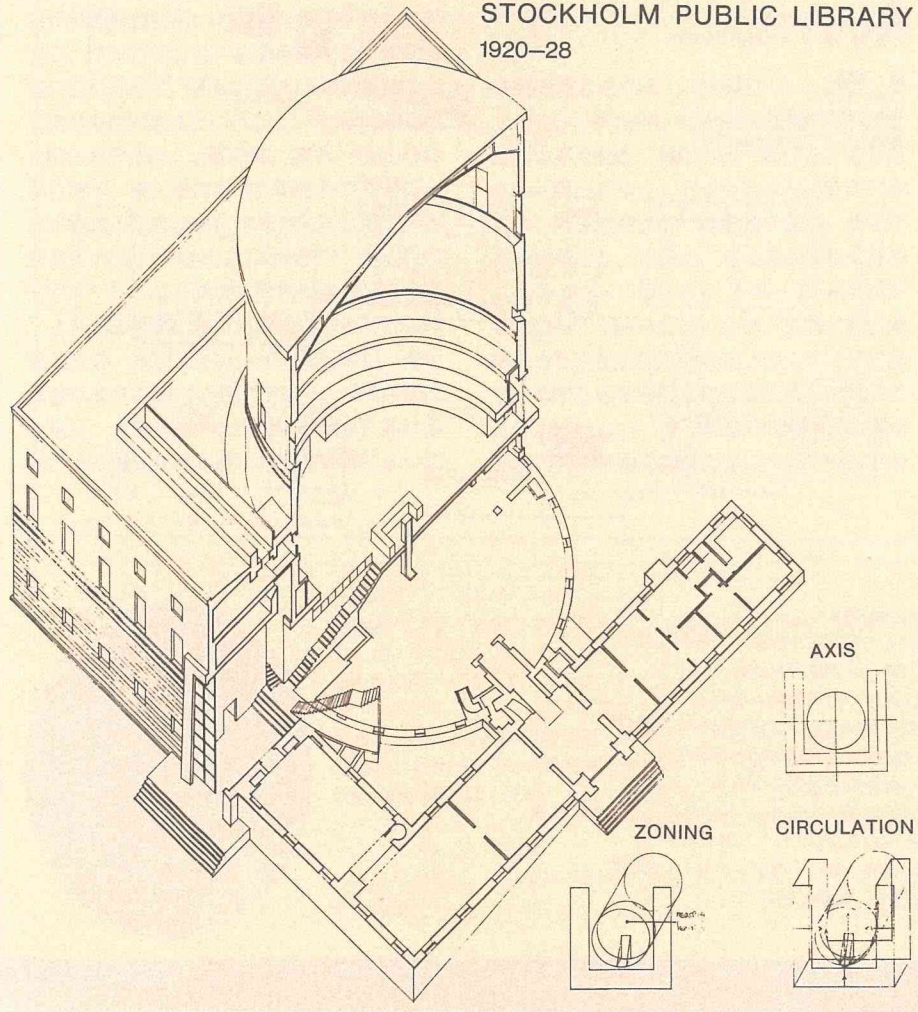


VIIIPURI LIBRARY
1930—35

②



STOCKHOLM PUBLIC LIBRARY
1920—28



基本的にル・コルビュジェ的な国際様式を範としているが、最終案には屋上庭園は含まれず、低い天井をもつ薄暗い入口から、天井の高い、明るいホールへの動線など、先のストックホルム図書館のもつ特徴的な空間と同様の構成を有している。アルトは、さまざまな貸出室、読書室を「それぞれ異なった勾配をもつ架空の山」に、また有名な円錐形のトップライト（この形は構造的な要求からきている）を「天上からその山にまんべんなく降り注ぐ太陽」にたとえている。さらにこの図書館は、照明・暖房・換気の施設をデザインに用いる先駆的な例を含んでいるが、おそらくここで最も知られているのは、音響効果を考慮してつくられた波形の木製天井をもつ講義室であろう。アルトは、これまでも、この波形の天井を数々の教会のデザインなどに用いてきたが、この講義室のそれはその集大成といえる。

ここに掲載されているドローイングは、アルトによるヴィプリ図書館、アスプルンドによるストックホルム図書館のそれぞれのプランから学生たちが、3×3mのディテールを自由に選びだし、プレゼンテーションしたものである。この課題のように、同一の機能をもつ（今回の場合は図書館）、2人の巨匠によるそれぞれの計画について、各々のアプローチ方法を探ることは、今日のような状況にあっても、建築デザインの“古典的”また、“近代建築的”問題の解決法として示唆を含んでおり、ひとつの出発点になるものと思われる。（翻訳構成／石井英樹）



デビット・スチュワート David Stewart
1942年 アメリカに生まれる
1964年 ペンシルベニア大学卒業
1971年～『今日の建築』誌（AA）編集記者となる
1972年 ロンドン大学コートールド研究所大学院より Ph. D. 学位をうける
1975年～ 東京工業大学工学部外国人専任教師
1980年～ 東京大学教養学科外国人非常勤講師
著書：『現代日本建築 明治 大正 昭和』講談社インターナショナル
『The Making of a Modern Japanese Architecture 1886 to Present』

- ①片山 竜 (茶谷研究室M1) Ryu Katayama
- ②黒田泰介 (東京芸術大学建築科M1) Taisuke Kuroda

設計のための居住空間単位

Design for Living Space

新しく3年生になった学生諸君を待ちうけているのは、この号で紹介されているような設計製図第IIIの課題である。しかしこれをこなすにはあまりにも実務基礎的なトレーニングが不足しているように思われる。そこで常識的な建築法規の理解と、身の回りの居住空間の把握を目的として新たな授業が設定された。前者は門田家平、後者は林雅子各講師、総括として山下教授が担当した。

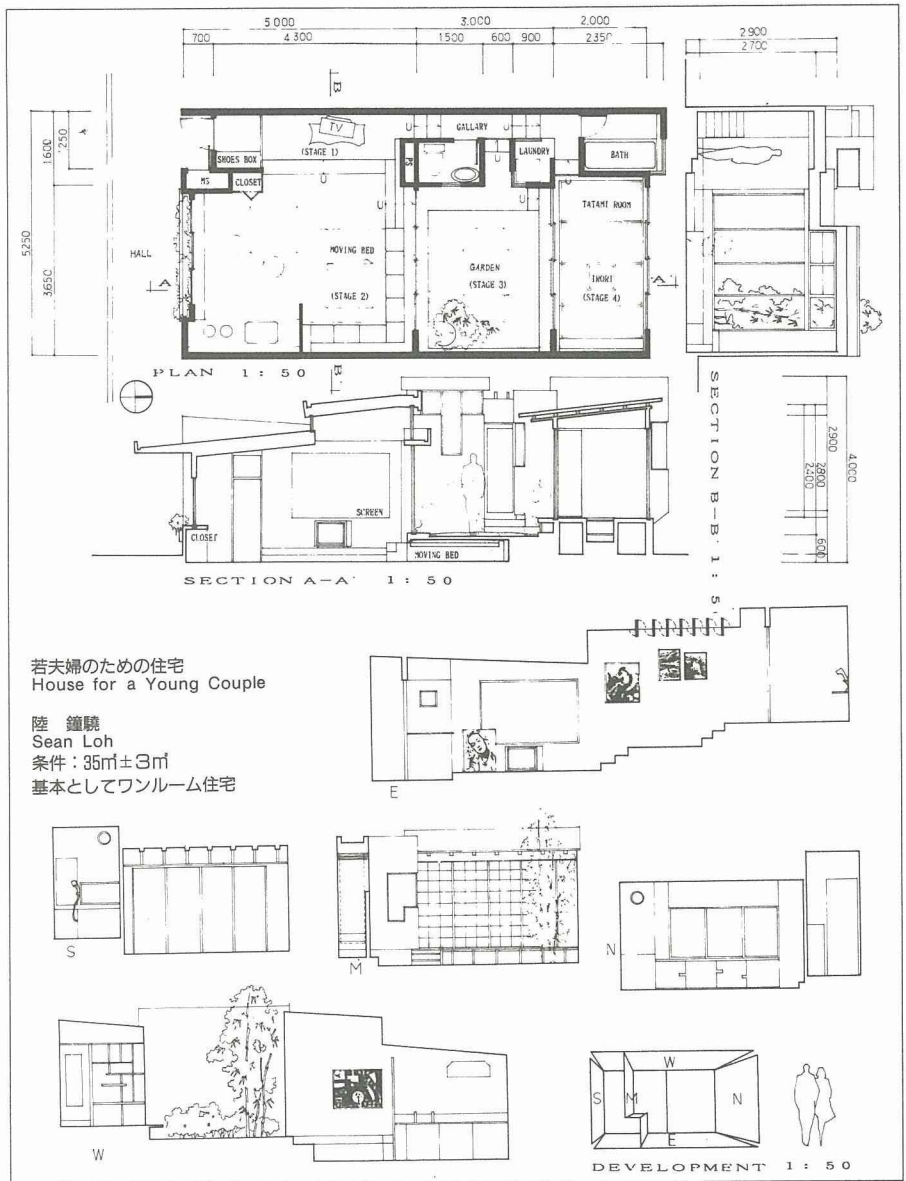
林 雅子 (非常勤講師)

Masako Hayashi, architect

この授業は、住宅を学ぶことの中に含まれている建築のすべてに共通する重要、かつ、基本的教養を、早い時期にきちんと身につかせようと、総括の山下教授の意図で新設されたものです。4回の授業の内容は、アイディアスケッチの即日提出、代表例の講評と参考例のスライド、住宅の見学、最後の講評と進められました。短期間で非常に慌ただしく、また、ほとんど同時進行していた“表番組”設計製図が極めて対蹠的な住宅であったためか、提出作品は、私は一体何をなし得たのであろうかと、苦い思いの残る結果でした。

この課題は、外的条件を除外した上で、家族構成も建物の規模も、最も基本的な最小の極限単位とし、さらにワンルームと条件をつけてあります。その狙いは、住まいとは何かを生活の原点に立ち戻って発想させるところにありました。普通の住まいの小型縮小版では成立しないはずで、したがって、間取りのバズルを抜けだして、住まいの中で、何を大事に優先させるか整理し、発想を転換し、生活空間として秩序とバランスを保つ、プランニングの面白さを体得できるのではないかと考えたからです。にもかかわらず大勢は、部屋数主義のコマーシャルイズムに毒されたものでした。

その中で陸案は、部屋を並べるのではない、生活のあり方に関する提案がある点で優れています。中庭をとり囲んだ伸びやかさも良い。ただし、それに比べて断面図や展開図はこまごまと煩雑で、屋根勾配と方位、可動ベッドの意味と処理に疑問があり、水まわりはもう少し整理して、収納スペースがほしいところでした。



林 雅子 Masako Hayashi

- 1951年 日本女子大学家政学部生活芸術科卒業
- 1951~56年 東京工業大学建築学科研究生
- 1958年 林・山田・中原設計同人設立
- 1971年~ 日本女子大学家政学部住居学科非常勤講師
- 1980~84年 東京大学工学部建築学科非常勤講師
- 1985年 アメリカ建築家協会名誉会員
- 受賞：日本建築学会作品賞 (1981年)、第3回エイボン女性年度賞芸術賞 (1981年)、第11回吉田五十八賞 (1986年)
- 主な著書：『空間の骨格—林雅子のディテール』彰国社、『現代の建築家 林雅子』鹿島出版会

ジオ-フロント・スペースと 現代都市デザイン

Contribution of Geo-front Space to Modern Urban Design

G.S. ゴラニー教授特別講義より

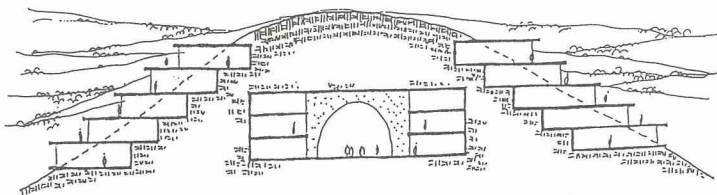
Professor Gideon S. Golany, Pennsylvania State University

講演会は、地下住居を核とした都市計画の可能性についての大胆な、また、拡がりのある提案に満ちていた。人類の得たシェルターの最も古いものが、洞穴形、堅穴式住居であったことが思い起こされる。

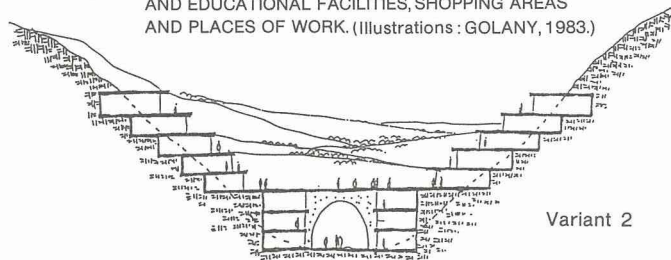
提案された新しい都市計画は、1) 傾斜地の利用、2) コンパクトに集約された都市・建築の形式、3) 大地に抱かれた空間、以上3点の統合によってこそ得られる、と概括される。すなわち、1) 特に近代アメリカに代表される平坦な敷地に限定される都市計画に先行して、地中海、ヨーロッパから中近東、アジアにいたる一帯では斜面を利用した集合形態が一般的であること。傾斜地を都市域として扱うことで、農地、森林や交通のために適した平地が確保される。また、2) ひろく歴史的にみられる城壁その他で集約領域を明示し、諸施設を配する計画概念は、E・ハワードからライト、ル・コルビュジエ、P・ソレリにいたる近代都市概念においてもまた共通するものであり、外敵に対して、統治制度と都市機能性、経済性において、そして住人の帰属意識の点で依然有効であるということ。3) 都市拡大の方向は水平方向、上昇方向、地下、の3つしかあり得ず、前二者の限界が明らかである以上、地下型都市形態のみに可能性を託し得る。教授はこれらの統合を“TRINITY CONCEPT”とよんで明快な骨子とするのである。

これらの考察の各々に長短があることは無論である。教授はそれらを一覧比較し、長所は他には求め得ないものであり、短所は現代技術と、社会的認知と非住居系用途における先行的な実践を経た漸次の実現計画によって

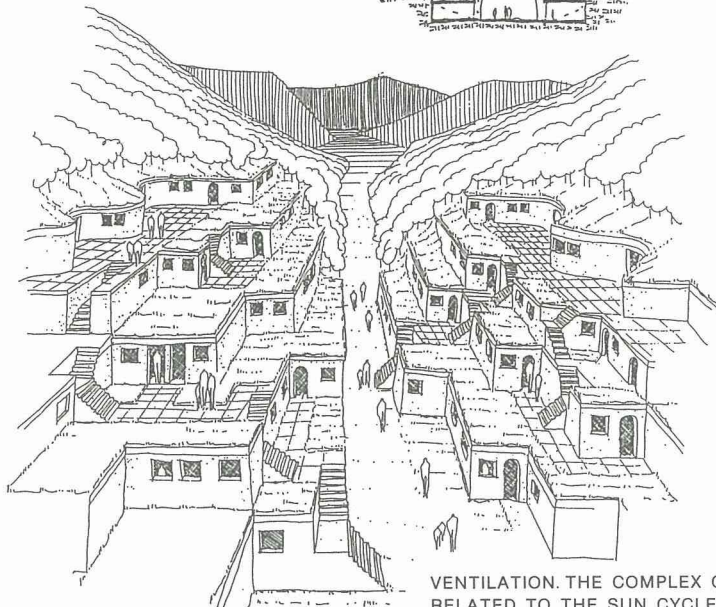
克服可能なものとして説明すると共に、ラフ・スケッチを示して具体的な計画手法を2つ提示してくれた。地中へと「降りる」のではなく「昇ってゆく」アクセスをとること、および、外部環境との「体感的一体感」が不可欠であること、である。なるほど、タイトルにあるジオ-フロント・スペース (GEO-FRONT SPACE) とは、文字どおり地表面からみた地中方向へのフロンティアであり、必ずしも地中深くに埋設された空間のことを意味しない、地下空間の地表面との接点部分の有効利用をはかるというのが主旨であ



Variant 1 COMMUNITY CENTER COMPOSED OF SOCIAL AND EDUCATIONAL FACILITIES, SHOPPING AREAS AND PLACES OF WORK. (Illustrations: GOLANY, 1983.)



Variant 2



VENTILATION. THE COMPLEX CAN ALSO BE RELATED TO THE SUN CYCLE. THE DESIGN INTRODUCES PRIVACY AND PLENTY OF SPACE FOR PEDESTRIANS. (Illustrations: GOLANY, 1983.)

り、その利点と例証がこれだけあるという組み立てには、なかなかの説得力があるし、むしろ日本においてこそ長期的な視野をもって取り組むべき問題のひとつであるという指摘にも頷ける。

要 points の整理は終わっている、その先を追う者はいないか、と教授の目は確信にみちて鋭く、颯爽としているとはいえ、いっぽうでこれらの議論が現状において多分に空想の域をでないものと感じられるのも承知の上のことだろう、そう、講義はこう切りだされて始まったのであった——これから1時間少しの間、型どりの既成概念は忘れて私の話を聞いてください、そのあと、再び常識の世界へ戻るかどうかは皆様のご判断にまかせますがね、——愉快そうに笑った目元が印象的であった。(レポート：建築計画第2講座助手・藤野雅統)

1991年5月1日
工学部緑が丘1号館113講義室にて



G.S. ゴラニー Gideon S. Golany

1956年ヘブライ大学 (エルサレム、イスラエル) 卒業 1966年同大 Ph.D.、その他。

1963年以来、イスラエル、アメリカ (コーネル大学他)、オーストラリア、イギリス、インド、日本 (東京大学先端科学技術研究センター、早稲田大学建築学科) の各国諸大学において客員教授、客員研究員、講師などを歴任。中国科学院自然科学史研究所名誉教授、同院中国古代建築研究所外国人理事、その他の名誉職を併任。1970年よりゴラニー・アソシエイトとしていくつかの具体的計画に携わる。現在はペンシルベニア州立大学教授。

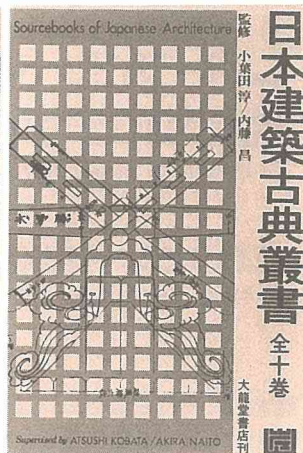
専門は都市設計、特に極限気象状況地域における計画、地下都市・住居の設計。

古典の思想や技術の 学的体系化をめざして

Systems of Classical Thought and Technology

内藤 昌 (建築計画第1講座・教授)

Akira Naito, Professor, Architectural Planning Section 1



私は、日本建築史・日本都市史・日本建築意匠等を専攻している。建築学学科建築計画第1講座は、創設以来、建築学の諸体系の中で、いわゆる「歴史・意匠」を担当するを本義とするからには、そうした専攻分野の研究はマクロにみて当然の責務とすべきであるが、時代の研究動向にあって、ミクロな問題意識に多少の変化は伴う。

さて、私は、学部で清家清先生(当時助教)の研究室に入り、主として実験心理学を応用した人間の錯視現象を建築的に研究し、建築のプロポーション論として、1955年卒論にまとめていた。卒論の研究はひと区切りしたもの、基本的には、古典建築書、たとえば西洋建築学のバイブルとされた『ヴィトルヴィウス建築書』や中国の『营造法式』のようなものが日本古典様式においてまとめられるべきと考へ始めたのである。

そこでさっそく清家先生に相談したところ、そうした歴史的研究は、藤岡通夫先生の指導をおおぐべきだと言われ、「歴史・意匠」の研究室入りをしたわけである。しかし、藤岡先生は、将来を心配され、「建築史の研究講座は廃止されるかもしれないから」と覚悟の程を諭された記憶が未だに鮮明である。

当時建築界は、機能主義全盛の時であり「機能的なもの美しい」という大名題が一世を風靡しており、古い建築の研究などは、反社会的と考へられていたのである。しかも歴史学では、マルクス史学が全盛を極めていたこともあって、日本の古典建築で正統性をもつ寺社の研究などは、それこそ「宗教はアヘン」である以上、そうした古典の建築的分析は、決して認められる時代相ではなかったのである。しかし藤岡先生の御厚情もあって、

大学院では、日本古典建築の設計思想や技術を研究することができた。「木割」(日本の Modular Co-ordination)の研究を主とし、そこでモジュールを日本住宅では如何に考えてきたかを論じて、「書院造における間の建築的研究」と題して、建築学における新制度博士論文第1号として1960年にまとめている。これは後に工業技術委員文献賞、建築学会論文賞をいただくことになる。さらに『新桂離宮論』(鹿島出版会刊)、『桂離宮』(講談社刊)、『角屋』(中央公論社刊)として住宅史論にまとめてもいる。

そうした研究者としての出発があったので、日本古典建築書の研究は、今日まで続行しているが、それに関連して、以下の分野を大局的研究視座とする。

①日本古典建築書の集大成/日本人が日本の古典建築学の設計思想や技術を忘却しつつある現在、全国的に日本古典建築書の悉皆調査を行い、集大成としてまとめているところ。すでに、京都大龍堂書店より『日本建築古典叢書』として刊行中である。多くの後筆研究者の協力あって現在までに『座敷雛形』『堂宮雛形(建仁寺流)』『絵様雛形』を出版し、それぞれ日本建築学会や日本産業技術史学会から奨励賞を受けている。また井上書院より『愚子見記の研究』を出版し、やはり日本産業技術史学会資料特別賞を受けている。今後「構法」、「住宅」、「数寄屋」、「城」、「堂宮(四天王寺流)」、「規矩」などを刊行する予定である。

②城と城下町の設計論/藤岡先生は日本城郭史の開発者であり、また私が名古屋工大で指導を受けた城戸久先生も藤岡先生と同学の友であった関係上、幸運にも両権威によって、

城の研究をより精緻にできたのである。学位論文作成中に江戸幕府作事方の建築設計図を多く発見してきた関係もあって、都市設計のシステムの研究として視座をひろめ、日本の現代都市の前身である城下町を分析することを問題意識としてもっていた。それを研究室をもった最初のテーマとし、以来「江戸と江戸城」(鹿島出版会刊)、『江戸の都市と建築』(毎日新聞社刊)、『安土城の研究』(朝日新聞社刊)、『名古屋城』(小学館刊)、『江戸の町』(上)(下)、『草思社刊)、『城の日本史』(日本放送出版刊)、『城なんでも入門』(小学館刊)、『新日本建築家協会推薦図書』として発表しており、中日文化賞を受けてもいる。また安土城の研究では、来年のセビリヤで開催される万国博日本政府館の中心展示物として現寸復元を行う予定である。

③風景学の研究/上記②の延長に、日本の都市の構成手法を主として風景学・修景学の視座より分析しようとしており、文学・哲学・宗教学などの関係をふまえて、西洋と異なる日本の都市のアイデンティティーを理論化しようとしている。従来ヨーロッパの都市論一辺倒であった日本の都市史研究に新しい視点を導入すべく努力中である。

以上は、要するに藤岡通夫先生が常々注意されていた「建築史家は、文学部の美術史家や考古学者と同じであってはならない。古典建築家としての古典を設計できる思想や技術を感性をふまえて学的に体系化することに努力せよ」を実行しているだけのことと思う。

新制第1期の東工大生として

Student Experiences in the First year of the New Post-war Education System



教養学科1年のとき（中央無帽が戸尾氏）

戸尾任宏 (1954年卒業・建築研究所アーキヴィジョン所長)
Tadahiro Toh Architect (Eng. '54)

私が東京工大に入ったのは1949年の春遅く、入学式は5月末か、6月でいきなり翌日から夏休みといわれ、戸惑いながらも喜んで一端帰省して北海道へ旅行したのを覚えている。新制大学が発足した最初の年で大学側もいろいろ準備不足であったのだろう。東工大に入る前、私は2年間神戸工専（現・神戸大学工学部）において既に建築を勉強していた。その前は海軍兵学校にいて海軍士官を目指していたのが終戦にあい、やむなく母校の灘中（旧制）に戻りあれこれ考えて神戸に入った。神戸では主任教授の滝沢真弓先生をはじめ、建築が大好きな先生がそろっていて、「建築は奥の深いものだよ」「面白いものだよ」と教えこまれた。製図ではルネッサンス様式のファサードをコピーしたり、住宅の設計課題を楽しみながらやっていた。しかし戦後の落ち着かない時代で、まだ本格的な新しい建築も資料もなく、村野さんの作品を見て歩いたり古本屋で戦前の『新建築』を漁ったりしたものである。

大阪そごうで開かれた広島聖堂のコンペの展示会で、2等の佐藤武夫、丹下健三、3等の前川国男、佳作の菊竹清訓などの図面に初めて直かに接し、なるほどこんなものかと思つた。1等案はなく、丹下案は明らかにニーマイヤーの教会から暗示を受けたもので、好感はもてなかった。

2年の時やはり大学に行こうと思ひ、設計製図以外の授業はほとんどにして大学（旧制）の受験勉強を始めた。あと2年の専門教育を受けながら旧制高校の卒業生と競うわけだから相当きついことであつた。当時、慶応大学の一連の作品や藤村記念堂をつくっておられた谷口吉郎先生のもとに行こうと思ひ、

東工大を受験することを決めていた。受験勉強を10カ月もしたところ構造工学の荒天義久先生（1944年卒・後に神戸大学学長）に、先になれば旧制も新制もなくなるから新制を受けた方が楽じゃないかと言われ、それもそうだなと思ひ神戸を2年で修了し、新制第1期の東工大に入った。

新制は最初の2年が教養学部（馴染めない名称であつたが）ということので一般教料がいろいろあつた。新しい先生が多数外部から来られ、ユニークな教授陣であつたのだろうが、発足当初でもあり、急場凌ぎの感が拭えなかつた。旧制と併存していたこともあり教室も急に増築した仮設だつたりして、余り気分のいいものではなかつた。最初のうちは受験勉強をやつたことばかりなのでのんびりしていたが、2年目には早く建築をやりたい、受験するはずであつた最後の旧制の1学年の授業に潜り込んだり、口実をつくつて谷口吉郎先生に話を聞きに行つたりしたものである。

3年になり建築のコースに入ったころ丹下健三の広島平和センターや坂倉準三の神奈川県立近代美術館が発表され、清家先生が森博士の家でデビューされたりした。ようやく新しい建築が生まれつつある時期であつた。

4年の夏、製図室で急に発熱し急性肝炎で1カ月入院、中間試験も受けられなかつた。それでも主任教授の二見先生から卒業させてあげると言われたが、自分からもう1年やらせていただくことにした。新制1期は最後の旧制と同時に卒業することもあつて、研究室に入って卒論を書かずに、就職も旧制優先で皆苦労をしたと思ふ。1年延ばすことにした私は、次の年清家研に入れていただいた。清家先生は当時斉藤邸、宮城邸と次々に新

しい住宅作品を発表され、大きな刺激を受けたものである。研究室にはさとうまみさんや研究生の山田（林）雅子さんがいて先生の仕事を手伝っていたし、最後の旧制には林昌二さん、篠原さん、宮坂さんなどの面々がいて活気に満ちていた。先生を交えてのお茶や雑談の中で多くのことを学び、確実に設計の世界に生きる一人になっていったと思ふ。

先生の推薦で卒業と同時に坂倉準三建築研究所に入り、私の学生時代は終わった。



戸尾任宏 Tadahiro Toh

1930年 西宮市生まれ、建築研究所アーキヴィジョン所長
旧制灘中、神戸工専（現・神戸大学工学部）を経て、
1954年 東京工業大学建築学科卒業
1954～60年 坂倉準三建築研究所、1960～63年 エコール・デ・ボザール
1964年 坂倉準三建築研究所に復帰
1971年 建築研究所アーキヴィジョン設立
1974～77年、1987～89 年東京工業大学講師
佐野市郷土博物館で1984年度日本建築学会賞作品賞受賞
主な作品：奈良県立橿原考古学研究所・付属博物館、清瀬市郷土博物館、
東京都埋蔵文化財調査センター、奈良県新公会堂、川越市立博物館など

良い建築を 創造するために

Towards excellence in architecture

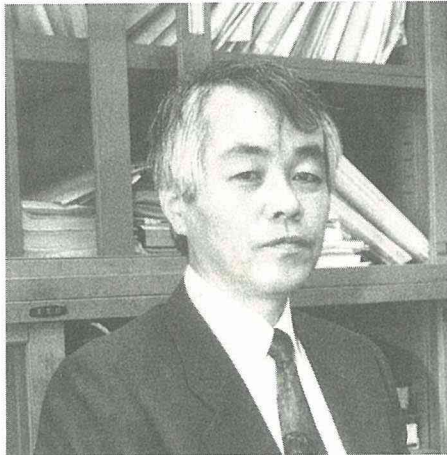
建築材料講座 Building Materials

小野英哲 (教授)

Hidenori Ono, Professor

建築学のすべての分野の最終目標が良い建築を創造することにあるとすれば、材料・構法を担当している私も創造の一過程である設計の教育に大きく関わっているということがいえよう。

しかし、私が教示する事柄が、課題設計を代表とする図面に反映されているかどうかの観点で見ると、否といわざるを得ない。相当の部分、設計と結び付けることを留意しながら教示しているつもりであるが、学生が材



料・構法にまで気を配る時間的余裕がないためと残念に思っている。少なくとも「材料・構法なんか問題じゃないよ」としらげきっているとは考えたくない。

いっぽう、卒業生が設計行為の中でもつ材料・構法に関する疑問や議論を投げかけてくる頻度はまことに多い。在学中にもう少し認識してくれたらと思いつながら、熱心なので親切に対応することになっている。

研究室に所属した学生にはつねづね、多くの建築を体験すること、時流に流されず良い建築を創造するためという信念を貫くこと、自分の課題だけでなく広く考究することなどを強調している。

研究室で材料・構法関係の卒論や修論をまとめて、設計分野に進み立派な仕事をしている卒業生がたくさんいる。目を輝かせて設計活動をしている卒業生ほど、熱っぽく材料・構法と建築のことを論じに来ることが多い。

設計への分野に関わらず研究、教育を通じてこのような卒業生をより多く輩出するというのが私の設計教育方針と考えている。

*50音順

Immeasurable→Measurable →Immeasurable

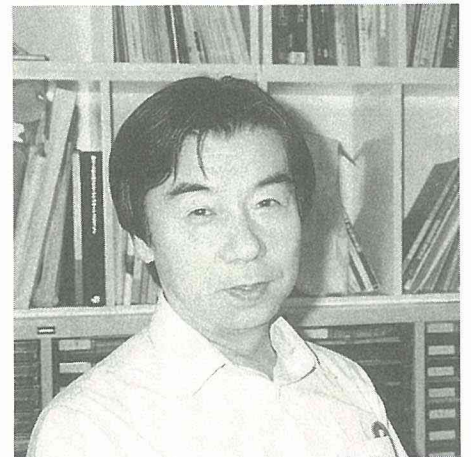
建築計画第3講座 Architectural Planning Ⅲ

志水英樹 (教授)

Hideki Shimizu, Professor

「偉大な建築とは、測り得ない (immeasurable) なものから始まり、設計の課程では測り得る (measurable) ものを通じて進むけれども、最後には再び測り得ないものとして終わっていなければならない」とはルイス・カーンの言葉である。

このImmeasurableな始まりとは、人びとが建築をつくるための「夢」、 「希望」あるいは「憧憬」といった、未だ形をもたない、しかし、万人共通のものである。



設計の課程とは、まずこのようなImmeasurableな「始まり」をいかにしてMeasurableな課程として受けとめるかである。人間や自然にかかわるさまざまな現象をMeasurableな現象として理解し、空間をつくるための指標としていかに有効たらしめるか。建築教育の第一の側面はここにある。

しかし、設計の課程はそこでは終わらない。Measurableな指標によってつくられた空間が、再び、どこまでImmeasurableなものを実現し得るか。このImmeasurableに始まり、Measurableを通して再びImmeasurableに立ち返る過程は、回転運動を行いながら、全体としては上昇するという一種の螺旋運動のほずである。

設計教育とはこの螺旋運動の回転数を執念深く重ねて、独断的Immeasurableのみの世界や、即物的Measurableのみの世界をいかに排するかにあると思っている。

じっくりと…

Steadily…

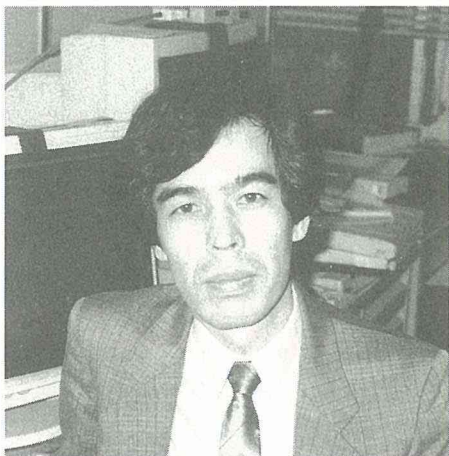
建築構造第2講座 Structural Mechanics II

時松孝次 (助教授)

Kohji Tokimatsu, Associate Professor

天才は99%の努力と1%の閃きより生れるといわれる。設計とかけ離れた研究を行っている小生にとって、優秀な建築家もまた天才と同様である。優れた建築をつくるためには、ありとあらゆる分野の知識を吸収する絶えまぬ情熱に加えて、卓抜した注意力と創造力が必要と思うからである。

このような資質を備えた学生を大学教育で一朝一夕に輩出することは難しい。大学教育の限界を越えた話かもしれない。しかし、い



ずれにせよ、人は20代までに培った基礎体力と30代までに蓄えた基礎知力をともに、勝負していかねばならない。年をとってからでは、体力と同様、知力の飛躍的な成長は難しい。それゆえ、大学時代は個人の知力を格段に向上させるまたとない時期である。狭い世界に閉じこもらず、幅広い視野と興味をもって、じっくりと物事の基本原則を学び、将来の糧にすることが重要である。その上で、自分の能力が最大限に活かせる方向を見極めることも必要となる。

人が何をなせるかは、その人の Vitality, Speciality, Originality と Personality の積分值に依存する。大学教育とは、教官と学生あるいは学生同士の交流を通じて、各自が各自の積分值を高めてゆく方向と方法を模索する刺激の場をつくりだすことであると思う。

教える側も学ぶ

Teachers also learn.

建築計画第1講座 Architectural Planning I

藤岡洋保 (助教授)

Hiroyasu Fujioka, Associate Professor

学生は最初は世間一般の価値観で建築を捉えているが、やがて仕入れたばかりの建築論や新しいモチーフをもとに、彼らなりの世界をつくろうとしはじめる。教師は学生に建築に関する基本的な常識とともに既成の概念を教えようとするいっぽうで、その概念の枠を拡げて(場合によってはつきずして)もらいたいというアンビバレントな願望をもっている。設計教育の現場では既成の価値観と寛容の精神が交錯する。あらかじめ設定されたゴ



ールはない。そこが設計教育のおもしろさであり、難しいところでもある。

ましてや、近代主義建築の有効性が強く疑われるようになって、今では「既成の概念」なるもの自体が拡散してしまい、自信をもって設計教育を行いにいく状況にある。しかし、だからといって、すべてを認める放任主義に陥ってはならないだろう。このような状況の中で私にできることは、建築に対してさまざまな考え方があることを認めつつ、自分の建築観を学生にふつけることだけである。そこで問題になるのはその建築観の内容である。それが何らかのインパクトをもち得るためには、教える側が「いま」について鋭い問題意識をもつこと、建築に対してビビッドでありつづけることが求められる。自戒の意味を含めて、この2つを「私の設計教育」の基礎にしたいと思う。

谷口吉郎先生から学んだこと

Lessons learned from Professor Yoshiro Taniguchi

工業材料研究所 The Research Laboratory of Engineering Materials

古村福次郎 (教授)

Fukujiro Furumura, Professor

昔、大岡山の金華堂という古本屋で、一冊の本を買いた。谷口吉郎先生の随筆で、その中で先生は、第2次世界大戦で荒廃した町や村で当時よく見かけた風景であるが、藁葺き屋根をトタン板で覆った屋根の何と醜く、それと比べて同じ雨露を凌ぐものでも、密柑の皮の何と美しいことかと書かれていた。

その後、吉郎先生には、歴史・意匠の講義や卒論で教えを受けた。平素、淡々とした講義の中で、エジプトのオペリスク、ローマの



サンピエトロバシリカとフィレンツェのドゥオモの話の時だけは、声に張りがあったように思われる。

後年、これらの建造物に再三接することができたが、その度に、これらこそ建築の真髄だと思わずにはいられない。特にオペリスクを見る時、建築の魂に遭遇する思いがある。

数千年を経て、その輝きを失わず、灼熱の砂漠の中、天に向かって屹立するさまは、人の心を奪わずにはいられない。しかし、これとて、密柑の生きた橙色の輝きには遠く及ぶべくもない。

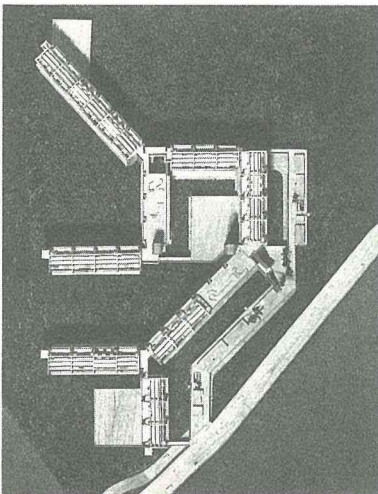
高層ビルが林立し、アスファルトと鉄とコンクリートの上を、無数の人と車だけが動き廻る、今日の日本の都市を見る時、人が作る造形物は、自然が作りだした造形物の前で、もっと謙虚であらねばと思う今日この頃である。

建築研究所でどのような研究なさっていますか。

瀬尾 研究管理という意味では施工合理化、構法開発、環境工学など幅広く関係していますが、個人的に関心か深いのは設計計画の分野です。その中でも大きく2つに傾向を分けることができ、ひとつは理論的な研究です。最初に考えたのは、設計計画の研究とは何かということです。その中で、発明的研究の必要を提言してきました。コルビュジエのような建築家はピロティなどいくつかの提案を行っていますが、これは一種の発明です。研究者がこの発明を担うべきだと思っております。この主張にしたがって提案的なことをやってきたのが、もうひとつの研究です。

具体的な研究成果は？

瀬尾 理論研究の方では、今日のような自然環境ブームのずっと以前に、自然と建築の関係を検討したことがあります。美学に近いところでは、現代建築に必要なのは「美」ではなくて「詩」だという考え方をまとめました。いずれも出版さ



重層人工土地による遊水地の多目的利用

瀬尾文彰さん(1965年卒)を建研に訪ねて

Visiting Mr. Fumiaki Seo in his office

先輩、元気ですか③

Talks with well-known alumni

れてますから見てください。提案研究の方では、人工土地型集合住宅の関連をいちばん長くやってます。静岡県との共同で遊水地の有効利用のため、人工土地型で大規模な住宅地を計画したこともあります。最近では、階高6mのコンクリートフレームに、木質のメゾネット住戸をはめ込む形式のものを民間数社と共同開発していて、先日この住宅の実大火災実験を建研でやりましたが、結果は概ね良好です。

民間の組織と違う建研の特徴は？

瀬尾 公的機関としてのメリットもあるし苦勞もあります。融通の効かないのがいちばん困りますね。しかし、公共的立場からの理念を通そうと思えば、それをやるのにいちばん良い場所だとも言えます。企業のような営利目的に縛られることはありませんから、提案研究なども当面のニーズに定めるものに限らず、長期的展望に立ったものをとどろだとしてゆくのか望ましいと思っています。それをやれる立場にあるのは建研だけです。実際にはなかなかやりきれいでありませんけれども。

研究者は発明的研究を担うべきだ。



瀬尾文彰

1940年東京生まれ

1965年東京工業大学建築学科修士課程修了

1965年東京工業大学建築学科助手

1966年建設省建築研究所研究員

現在、建設省建築研究所第五研究部長工学博士

主な著書：『建築計画の理路』（井上書院）、『環境建築論序説』（彰国社）、『意味の環境論』（彰国社）、『詩としての建築』（現代企画室）

建築家として、どのような方面に興味をおもちですか？

武田 今、アジアに興味があります。東工大での16年間を終えるとすぐ、インドネシアのカリマンタンへ行きました。ジャワやバリでは人口が爆発的に増加し、首都ジャカルタやスラバヤでは職のない都市難民がスラムを形成しました。そこで、フランス、ドイツ、カナダ、日本などが協力して、カリマンタンやスマトラなどの熱帯雨林を開拓し、街をつくることにしました。その日本チームに私も参加したのです。インドネシア人100人ほどを含めて約150人の組織となりました。クライアントはインドネシア政府、資金は世界銀行が出資しています。

街づくりをゼロからなさるには大変な苦勞があると思いますが、

武田 赤道直下の土地は、意外にもひどく痩せてるんです。バクテリアや太陽熱などによる養分の分解が凄まじい上に、スコールが表土を流し去るためです。プロジェクトは4段階のフェイズに分かれます。私が参加したのはフェイズ3（実施設計直前の段階）でした。実際の作業工程は、航空、もしくは衛星写真で数少



七尾の住宅
ない適地（たとえば州都から水上バスで3日の奥地など）を選びだしてマッピングを行い、土壌・森林・水・農業・経済の各スペシャリストが詳細な情報をその地図に落とし込みます。それをベースに私たちプランナーがインフラやファシリティ（道路網・ダム、学校・教会モスク、畑など）を計画、実施設計に移していくものです。

現在なお、進行中なのですね。

武田 ええ、でも今世紀中にどう効果ができるというものでもないのです。技術、経済以外にさまざまな問題、反省点があって、ひとつひとつ越えていかねばなりません。たとえば先住民や移住民の人たちとの交渉など、彼らから学ぶべき点は多くあります。今、世界ではエコロジーブームですが、彼らは気の遠くなるほど長い時間をかけた経験から、焼畑の限度をきちんと心得ています。それを私たちが何も考えずに開発すれば、一瞬にして大地は赤土と化すでしょう。

インドネシアでの経験が今の仕事に生かされてるようですが、

武田 帰国前、インドネシアで得た報酬をインドネシアで使いきろうと、バス旅行をしてきました。「貧しい人びとに残された土地は何故ジャングルなのか？」という疑問に対して答えを得ようとしたのだけれど、本当に何を理解できたのか、



鳴海の住宅

コンクリートの破壊実験などはかなり行っているイメージとはかなり違いますね。

瀬尾 セネコンなどの民間企業の研究所がハード分野の研究開発能力をものすごく伸ばしてきていますから、建築研究所ではその方面はむしろ斜陽です。ハード中心の研究からソフト中心の研究への移行が必要なのではないでしょうか。公的機関としては、これからの建設業界が進むべき方向を指し示す役割も大切でしょう。そのための研究が望まれているのではないのでしょうか。

学生時代についてお聞かせください。

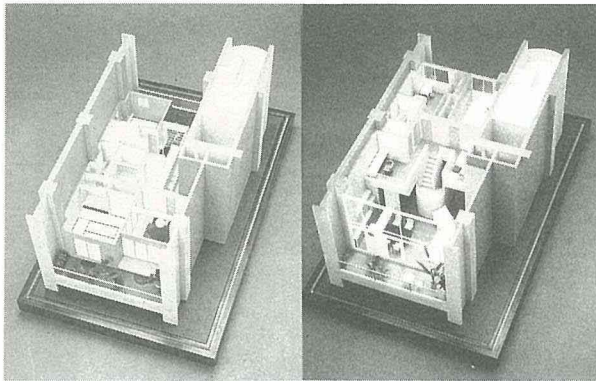
瀬尾 当時は類というものがなく、2年に進級する時に全学科から選ぶのです。建築は人気のある学科でしたね。1学年は30人程で、同学年には三栖邦博氏や工藤国雄氏がいました。紀谷先生（東工大）もそうです。中国系の女子留学生がいましたが、今は音信不通のようです。

当時の設計製図の授業はどんな様子でしたか。

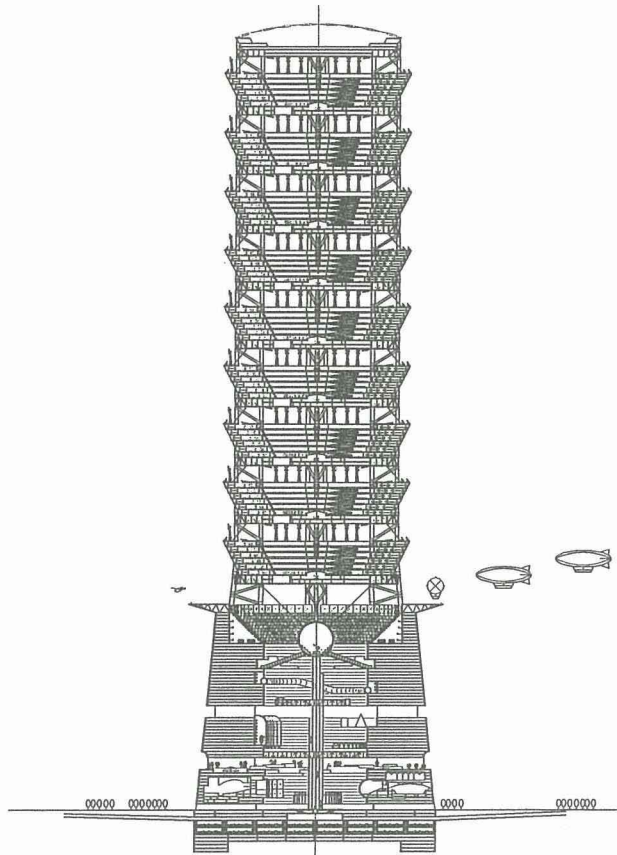
瀬尾 谷口吉郎先生がまだ現役で、先生の講評というのは、なんとというか、傑作でしたね。ぼくらがむきになっても暖簾に腕押しという風で。最近のように非常勤講師を呼んで行うということはなかったように思います。

今の学生に対して一言お願いします。

瀬尾 これからは、いろいろと大変な時代になって、建築の捉え方も難しくなるでしょう。たとえば地球環境問題のような大問題は建築の美の視点だって変えるでしょう。自由で大胆になることが大事だと思います。



フレックス型中高層住宅



エコシティ=スカイモデル1991

インタビュアー：柴田哲司・永田恵子・谷口知史・陸鍾驊（建築学科3・4年生）
interviewer：Tetsushi Shibata, Keiko Nagata, Tomofumi Taniguchi, Sean Loh

アジアの体験が設計の根底になっている。

実はよく分かりません。今のところ時間が許せば、欧米よりアジアを旅したいですね。七尾の住宅（1987年ピロティ式個人住宅）は、その時のアジアの体験がなければうまくできなかったでしょう。アジアには形式に縛られない柔軟な思考があるような気がします。

学生時代はいかがでしたか？

武田 小河さん、藤井さん、藤岡さん（以上東工大助教授）と同期です。学生運動終末の時期で、大学より雀荘やジャズ喫茶に通い、本当の意味での建築は、篠原研究室に所属してから勉強したようなものです。私は最初研究生だったので、院生が自分の研究に没頭したのと違って、長い間篠原先生の実施設計の手伝いをさせていただきました。篠原先生から徹底的に純粋美学としての建築を叩き込まれていたようなものです。当時の先生の仕

事は、ひとつの住宅の設計に、少なくとも2年費すというペースでした。

今の学生にいておきたいことは？

武田 そうですね、『華』のバックナンバーを拝見したのですが、学科内の多少の保守的な雰囲気か気になりました。建築の学生は自由であるべきだと思います。建築の世界は多様で、ひとつにオーソライズすることはできません。たとえば製図室で皆の顔が、同じ方向に向いている、ゾッとて気持悪いでしょう。正統派を目指す者もいれば、何かを壊しながら生みだす者も絶対に必要です。同じことは学生を取り巻く環境についても言えます。個々の指導や思想は重要だけど、それらを包括するシステムは柔軟性をもつこと、建築の意味を一義的に位置づけるのではなく、違ったものをどう受け入れていくかが大切であると考えています。学生には単一のイデオロギより多様な価値観が必要だし、それによって自ら、建築に対する接し方、考え方を感じとっていくべきものだと思います。

先輩、元気ですか③

Talks with well-known alumni

武田光史

1950年生まれ

73年東京工業大学工学部建築学科卒業

78年東京工業大学建築学科助手

86年武田光史建築デザイン事務所設立

88年～東京工業大学社会工学科非常勤講師

主な作品：分譲地の住宅（1977）、馬込の長屋（1984）、七尾の住宅（1987）、

T.Cottage（1989）、ナガモス・モデルハウス（1989）鳴海の住宅（1991）



武田光史さん(1973年卒)の
オフィスを訪ねて

Visiting Mr. Mitsufumi Takeda in his Office

●ぼんやりと米国留学を考えていた時、東工大の大先輩からこう言われた。「何故、今さらアメリカなんですか？ デザインの勉強に行くなら、インドか、中国か、イタリアか……。文化・歴史のある環境に刺激を受けて生活することが、真のデザインの勉強です。」その時、心の中では「なるほど、一理ある。」と実は感心していたのであるが、「アメリカは、現代の最高の文化人が世界中から集まる国です。アメリカに行けば、一国に限らず世界各国の文化・歴史が体験できるはずですよ。」と、とっさに答えてしまった。

●5年間働いた日建設計を退職し、1987年6月に渡米。ニューヘヴンのイエール大学修士課程ポストプロフェッショナルコースに2年、ニューヨークのバーナード・チュミ・アーキテツツ、日建インターナショナル・ニューヨークに勤めて、今年6月に帰国した。

●最高の文化人であるかはともかくとして、さまざまな人びとが集積する国であることは正しかった。外国人ばかりではなく、米国各地から実にバラエティに富んだ思考をもつ人が集まってくる。外国人建築家が米国に移住し成功を収めた例は、古くは、ミース、グロピウス、サーリネン、最近では、シーザー・ペリ、ヘルムート・ヤーン等々数えきれない。

●大学院に入学してくる人のバックグラウンドは、これまた多岐に渡っていて、彫刻、美術などの出身の他、数学、哲学、舞踏出身という人もいる。一例として、イエール大学の同期生は、アリゾナの砂漠で10年間石油プラントを作っていた作業員という経歴をもって入学した。36歳

海外体験記 ③ Personal experiences abroad

現代米国学生・建築家気質

Modern American Students and Architects

安田幸一 (日建設計)

Kōichi Yasuda, Architect

の新入生は、しばしば教授より年上で、年功序列を重んじる日本人には不思議に感じられるのだが、ここでは何の異和感もなく授業が進められる。18歳という若年で人生の進路を決定する日本のシステムは、ここでは疑問に思われるのである。

●イエール大学でのスタジオ（設計製図）は、デザイン教育の幹となる授業で、単位数（9単位）でも、実質時間数においても、全体の中で大きな比重を占める。一学期間（半年）身を預けるだけに、講師を選択する日の学生の目は真剣だ。プログラム内容、スケジュールなどに質問が集中するが、忙しくてあまり学校に來れないなどとちょっとでもほめかすと、極端に希望者が減る。学生自身も自分の興味の対象を適確に把握しているためか、スター建築家講師に人気集中するわけ

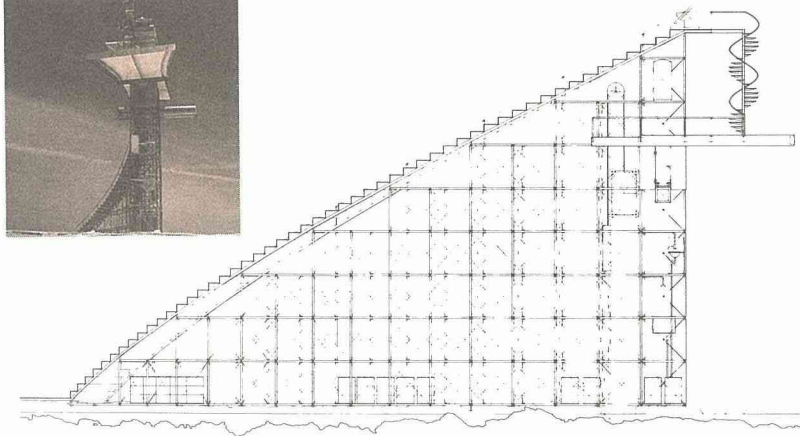


イエール大学・安藤忠雄スタジオ「ジュリー」'87年10月

でもなく、割合うまく分散していく。

●スタジオの締め切り近くは、一種異様な雰囲気にも包まれる。締め切りというプレッシャーは、受験戦争をくぐり抜けてきた日本人には想像できないほど大きいらしい。日本人学生は、せつせと要求された図面を揃えていくのに対して、米国人は、最後の最後まで模型をいじっている。常によい案を模索し、追求し続ける。アイデアを決定することが締切りの意味なのかもしれない。時には最終プレゼンテーション会でもイエロートレベに描いたスケッチを2、3枚ピンナップしただけで、延々とコンセプトを喋り続ける……。建築は自己の表現手段のひとつだという観点からすれば、話術もそのひとつであり、十分に図面をカバーするのである。

●一学期間ではスタジオの他に、3つの必須単位がある。この3クラスは、建築に限らずどの分野（どのスクール）の授業でもよい。経済やビジネスの単位を取る者もいれば、歴史や語学でも可である。やはり、建築理論のクラスは、先生によっても異なるが概して人気がある。ここ

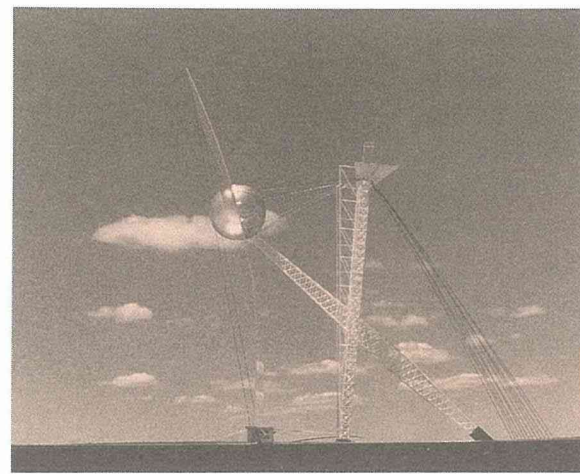


イエール大学・トーマス・ビービー・スタジオ「赤道直下の個人住宅」'89年5月

で勉強する理論は、最も新しいものでも初期モダニズムまでで、図書館のライト、ミース、コルビュジェの本はいつも貸し出し中で、本棚には残っていない。今何が流行っているかというトレンドには見向きもせず、ひたすらモダンの原点から出発する。夜11時に追い出されるまで、図書館の机にへばりつく様子は、^{ジャンク}皮肉にも10数年前、夜中に雀荘から追い出された日本での学生時代を思い出させる。

●私が米国に滞在した4年間は、同時に安藤忠雄氏がアイビーリーグ3校でたて

続けに教えていた時期と重なり、「アンドー・ブーム」と「日本建築ブーム」でもあった。建築理論やランドスケープのクラスでは、必ずといってよいほど、竜安寺の石庭、苔寺、住吉の長屋のスライドが使用される。日本の文化を語れることが現代米国文化人であることの証明であり、ファッションでもあるようだ。イエールでは毎年夏期研修と称して日本のゼネコンが日本に学生を招待する制度があった。たった2人の席に多数の学生が殺到する。これは、日本文化への憧れを如



←イエール大学・バーナード・チュミ・スタジオ「プラネタリウム+スイミングプール」'88年5月

実に示している。

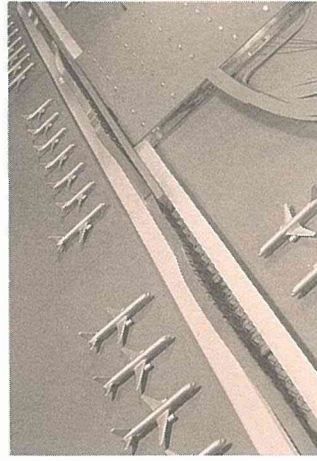
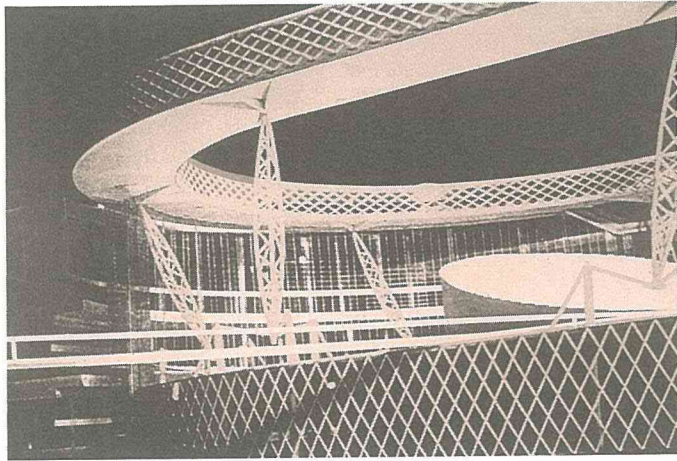
●米国での建築家の社会的地位はどうだろうか。建築・都市関連の記事が、ニューヨーク・タイムス紙の文化欄を必ず一区画占めるし、大きな美術館（ギャラリーではない）での建築展は頻りに開催される。それだけ、一般の人びとが興味を強くもっていることであり、少なくとも建築家の職能を理解している。ところが価値の尺度が、金で計られる素直なこの国での建築家の給料は、残念ながら決して高くない。すべてのスクールの中で、建

築学部の授業料は、医学・芸術に次いで高いのに反して、卒業後得られる低所得は、MBA（ビジネス）の学生に減価償却率が悪いと笑われてしまうほどだ。

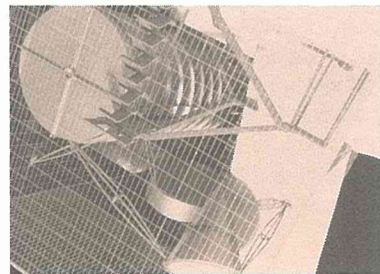
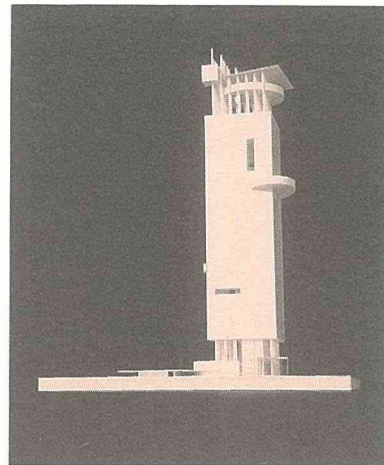
●就職に対する考え方もかなり異なる。5月末の学位授与式までに進路を決めたのは、例によって日本からの留学生のみであった。卒業後は多忙な学生生活後の休息として旅に出る者が多い。ゆっくりと自分の生き方を探求する。

●米国学生、建築家気質は、何だ昔とちょっとも変わっていないではないか……と

思われるかもしれない。確かに、昔ながらの豊かなアメリカは今も存在する。その豊かさの中から、各個人が何を選ぶかがアメリカを支える大きなパワーである。小さな頃から朝食ひとつとっても、卵の料理法、ジュースの種類すべてを自分で選んで指定しなければ食べられない環境で育てられてきた選択力。20数歳までずっと、自分の学力に準じた学校のカリキュラムにただ従ってきた日本の学生にはみることのできない真剣な姿を、数多く目にしたのは事実であった。



◀フランス国立図書館コンペ：バーナード・チュミ・アーキテクツ'89年7月
◀関西新空港コンペ：バーナード・チュミ・アーキテクツ'88年11月



↑東京フォーラムコンペ'89年9月
◀ジャカルタプロジェクト：Nikken America Inc. '90年2月

安田幸一 Kōichi Yasuda
1958年横浜生まれ
1981年東京工業大学建築学科卒業
1983年同大学大学院理工学研究科建築学専攻修了
1983年日建設計・東京入社（-'87）
1987年米国イェール大学大学院建築学部（-'89）
1988年バーナード・チュミ・アーキテクツ（-'90）
1990年日建設計インターナショナル・ニューヨーク
1991年日建設計・東京復職



最近の学生はことごとく病んでいる。授業の多いのは本業であるからいいとして、多すぎるイベントや展示会、次から次で情報雑誌や作品集は、その重みを感じなくさせるほどあふれているし、はじけたバブルの泡に当たって刺激を受けるところか疲れている。そのせいか、どんな建築に対しても不感性になっているし、少しずつ建築オタクの学生は少なくなってきている。こんな状況は「過剰と退屈」という言葉ですすにだいたい前から指摘されているのだが、いまや世間一般の話ではなく、緑が丘某研究室にも密かに蔓延しつつある。

そんななかで、最近の学生たちに少なからずショックかつ栄養剤ともなったのは、以前本学の非常勤講師でもあった伊東豊雄氏が書き下ろした時評「大学のデザイン教育を憂慮する」（新建築：91年8月号）であった。この記事は「最近、大学の設計製図の授業に行くことがひどく憂鬱になりはじめた。」というドキとする文面から始まり、学生たちの社会性のなさ、エネルギーの欠如、そして海外のスタジオ（設計製図）の経験談と日本の教育システムの構造的な問題を指摘したものである。同じような内容のことはわれわ

れも日頃から口にしているのだが、学生たちにとって憧れの存在で、自分たちと感覚がいちばん近いと思っていた建築家からの一言はさすがに重みが違う。学生のなかには苦笑したり、机の前に時評の拡大コピーを貼っている姿が多く見られたところをみると効能はあったようである。

さてこんな状況であるが、最近もうひとつ気になっているのは、学生コンペの入賞者欄に東工大生の名前が見当たらなくなったことである。コンペは、自己の認識と建築的な思考を試す意味で在学中にひとつでも出して欲しいものであるし、特に設計製図の機会が減ってしまう大学院生などには、研究で論の組み立て方を学び、コンペで図面の勝負をすることを薦めている。

毎年の恒例行事となった卒業制作の手伝いには、先輩の作品の魅力や良し悪しによって手伝うといった、緊張感のあるやりとりを見ることは難しくなっている。先輩が後輩に媚びて手伝いを確保するといった最悪の事態も起こりつつあり、そんな時であるからこそコンペで自分を試して欲しい。

今、研究室の学生たち数人が、コンペに取り組み始めた。その作業を目にしていると、入賞の兆候がちらほら見えるものもあって楽しみである。そんな学生たちに身近な私自身が彼らの栄養剤になれば幸いである。ちょっと苦いかも知れないけれど……。



深夜、コンペの図面を仕上げる学生

TIT 建築設計教育研究会会則

第1条 名称

本会はTIT建築設計教育研究会と称する

第2条 目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援し、ひいては優れた建築家を世に送り出すことを目的とする。

第3条 事業内容

本会は次の事業を行う。

- ①国内外の建築家・特別講師等の招聘
- ②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存
- ③展示会・講演会等のイベントの開催
- ④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行
- ⑤その他、本会の目的にかなう事業

第4条 会員

本会は本会の目的に賛同する個人または法人の会員によって構成される。会員個人または法人の拠出する会費を基金として本会を運営する。

第5条 会費

本会の会員の会費は1口年間10万円とし、期間は1年間以上6年間までとする。

第6条 役員

本会は次の役員を置く。

運営委員6名(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

第7条 総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

第8条 会計

本会の会計年度は10月1日に始まり、翌年9月30日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

第9条 存続期間

本会の存続期間は1990年10月1日より1996年9月30日までとする。

第10条 会則

本会則は1990年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決議を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。

●細則

TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

第1条 役員

本会の役員は構成は下記による。運営委員6名(学外運営委員3名、学内運営委員3名) 運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。

東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授・建築計画第二講座教授・その他1名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により3名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

第2条 総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)の出席による集会とする。役員による業務報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決議を行う。

第1回外国人建築家招聘

本会の事業の一環として、米国人建築家アンドレア・リアーズ女史が、客員研究員として招聘され、1991年9月末より11月初めまで、約5週間滞在した。設計製図第IV第1課題、その他学生の設計教育の指導協力・研究を行った。

ANDREA P. LEERS (AIA会員) 経歴

1964年 ウェルズリイ大学卒業 1966年 ベンシルベニア大学大学院卒業 1970年 リアーズ・ワインザッフェルアソシエーツ(ボストン)設立 1982年 東京大学へ給費留学(研究・教育) 1975~78年、1990年 ハーバード大学大学院講師 1981~88年 イェール大学講師。主な作品として、以下のものが日本で発表されている。ハンスコムフィールド空港トラック車庫(1982年)メイン州の休暇住宅(1989年)、フィリップ・エクセター・アカデミー天文台(1989年)、ボストン地下鉄コントロールセンター(1991年)



1991年度会員リスト(申込順)

(社名、口数、本会への代表)

山下和正建築研究所 2 山下和正(1959年卒) / 構造計画研究所 6 富野壽(1959年卒) / 山田守建築事務所 2 山田達郎(1952年卒) / 梓設計 1 佐々

木邦夫(1963年新潟大卒) / 熊谷組 4 黒坂重蔵(1947年卒) / リクルートコスモス 6 高田直澄(1971年卒) / 松田平田坂本設計事務所 2 蛭川一男(1948年卒) / INAX 2 伊奈輝三(1960年卒) / 伊達計画文化研究所 2 伊達美徳(1961年卒) / 石本建築事務所 2 荻野郁太郎(1957年卒) / 渡辺建築事務所 4 渡辺益男(1949年卒) / コミュニティ企画研究所 2 植田一豊(1948年卒) / 丸ノ内建築事務所 2 田口好孝(1955年卒) / 佐々木設計 2 佐々木正久(1969年卒) / 日建設計 4 林昌二(1953年卒) / 建築文化研究所 2 八木清勝(1966年卒) / アル・アイ・エー 2 鳥飼勢三(1959年卒) / 三井建設 2 真野晃(1961年卒) / IAO竹田設計室 2 竹田秀道(1965年卒) / 間組 2 森隆雄(1947年卒) / 西島大次郎建築事務所 2 西島大次郎(1967年卒) / 巴組鐵工所 2 松下富士雄(1950年卒) / 楠建築設計事務所 2 楠雅史(1961年卒) / 大成建設 8 飯屋蘭健一(1955年卒) / 日建ハウジングシステム 2 舟木昭二(1951年卒) / 日総建 1 中村晃(1953年新卒) / アモ設計事務所 1 篠崎好明(1966年卒) / 清田育男計画設計工房 1 清田育男(1957年卒) / 森京介建築事務所 2 森京介(1953年卒) / 平井設計工房 1 平井秀平(1971年卒) / TEN設計 2 田爪寿典(1953年卒) / 構想建築設計研究所 1 上浪恒(1953年卒) / 山下設計 1 井上雄治(1949年卒) / 東陶機器 2 豊田万三(1955年卒) / 戸田建設 2 深谷辰彦(1950年卒) / 村田靖夫建築研究室 1 村田靖夫(1968年卒) / 新日本製鐵 1 今井章彦(1962年卒) / 鹿島建設 8 中島隆(1951年卒) / 鴻池組 2 根本義

英(1947年卒) / ナカノコーポレーション 1 山田照二(1956年卒) / 荒木正彦設計事務所 1 荒木正彦(1973年卒) / 竹中工務店 8 山野井良明(1959年卒) / 葛西潔建築設計事務所 1 葛西潔(1978年卒) / 吉田設計 1 吉田勲生(1965年卒) / 真工設計事務所 1 志田真男(1969年卒) / 日本設計 2 松原洋一(1958年卒) / シグマ22建築研究所 2 坂本正俊(1950年卒) / 西松建設 2 太田茂雄(1957年卒) / 清水建設 8 藤江澄夫(1960年卒) / 建築研究所アーキヴィジョン 1 戸尾任宏(1954年卒) / 大林組 8 樋口元一(1952年卒) / 東京電力 1 大島郁夫(1959年卒) / セグ設計事務所 2 村上陽一郎(1953年卒) / 久米建築事務所 2 草壁章(1967年卒) / 東急建設 1 豊光光夫(1953年卒) ※本会への代表者の卒業年で、ことわり書きのないものは、東京工業大学建築学科卒とする。

●入会申込は随時事務局にて受け付けています。

1991年度役員リスト

- 運営委員長 | 中島 隆(1951年卒) 鹿島建設(株)専務取締役 設計・エンジニアリング総事業本部長
- 運営委員 | 林 昌二(1953年卒)(株)日建設計副社長、新日本建築家協会会長
- 運営委員・監査役 | 戸尾任宏(1954年卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役、新日本建築家協会理事・関東甲信越支部長
- 運営委員 | 茶谷正洋(1956年卒) 東京工業大学教授、建築学専攻主任教授
- 運営委員 | 山下和正(1959年卒) 東京工業大学教授

●運営委員 | 瀧口克己(1967年卒) 東京工業大学教授、建築学科主任教授

第4回運営委員会の報告

1991年11月8日、中島隆、林昌二、戸尾任宏、茶谷正洋、山下和正の各氏出席のもとに開かれ、下記の事項を行った。①1990年度決算報告の承認②1991年度事業計画の承認(上記報告は会員に発送済)③副委員長の設置の提案

計画系人事異動

青木義次教授(1991年7月16日付にて建築設計基礎講座助教授より計画基礎講座教授へ昇任) 八木幸二助教授(1991年10月1日付にて一般教育・工学助教授より建築設計基礎講座助教授へ異動)

華Ka No.3 1991年11月30日発行 発行: TIT建築設計教育研究会 (事務局: 〒151 東京都渋谷区千駄谷2-10-7 山下和正建築研究所内) 編集: 山下和正・前田哲男・藤野雅統(東京工業大学工学部建築学科建築計画第2講座) 編集事務局: 東京工業大学工学部建築学科山下研究室内・市川玉枝 (〒152 東京都目黒区大岡山2-12-1 phone 03-3726-1111 ex.3167) 編集協力: (有)松井編集室 取材協力: 建築学科3・4年生有志

Editor: Yamashita Lab. Department of Architecture and Building Engineering Tokyo Institute of Technology 2-12-1 O-okayama Meguro-ku, Tokyo 〒152 phone 03-3726-1111 ext.3167